

「唐以前胎発育説の研究」

05LM202N 鈴木千春

要旨

今から 2200 年以上前の古代中国で編纂された医書『胎産書』には、胎児の発育記述や妊婦の養生法等の論説が妊娠の各月ごとに記されている。同時代の胎児発育記述は『管子』『淮南子』にもあり、各書の記述は全く異なる。南北朝隋唐代の発育記述は『諸病源候論』『千金方』と『医心方』所引『産経』に存在し、いずれも『胎産書』系統の内容に別系統の理論が付加され変化・発展したと考えられる。そこで本稿では戦国秦漢代から南北朝隋唐代の妊娠 10 ヶ月の記述に焦点をあて、その根拠と論理について考察する。また『胎産書』系統の内容だけが後世の医書に受け継がれた理由についても明らかにする。

戦国秦漢代の発育記述では発育器官に注目し検討したところ、以下の結論が得られた。(1)『胎産書』に記された発育器官の血・気・筋・骨・膚革・毫毛は『周礼』や『脈書』にも見え、身体構成器官として認識されていたことが明らかになった。(2)『管子』は隔・骨・脳・革・肉の発育を記すが、身体構成器官として骨や肉とともに脳や隔が記される例は他の文献に見えなかった。これは血気を生命の根源とする水地篇の思想に基づき、血・気の代わりに隔と脳が加えられたと考えられた。(3)『淮南子』に記された発育器官の肌・筋・骨は、外郭の形成後に内部の発達が進む発想をもとに、表皮と骨格を示すと考えられた。(4)『莊子』その他多くの古典籍では「気」あるいは「精」が生命の根源として用いられていた。この「精」「気」の概念の発展は医書にも影響を与え、『靈枢』経脈でも「精」が生命の本と考えられていた。

戦国秦漢代の発育記述について五行説との関係に注目し検討したところ、以下の結論が得られた。(5)『胎産書』は 4 ヶ月目から五行精＋石精を順に授かり、身体器官が発生する過程を記していたが、五行精と身体器官の関係は現行の五行説とは一致しない。しかし『管子』四時篇や『周礼』天官に類似の記述があり、現行五行説とは異なる配当の存在が理解された。一方、五行精に一つを加え六にする記述は『左伝』『尚書』にある。さらに六の概念は他にも多数存在していた。(6)『管子』水地篇では五味と五

臓・五臓と五内・五臓と九竅、『淮南子』精神訓では五臓と九竅の関係が説かれていた。このような五味・五臓・九竅の関係は『素問』『靈枢』で五行説と関連する形で見られるが、合致する記述はなかった。(7) 上述結論の(5)(6)より、『胎産書』『管子』『淮南子』の記述は発展段階の五行もしくは未詳の理論の存在を示唆していると推測された。

戦国秦漢代の発育記述について現代医学知見と比較・検討したところ、以下の結論が得られた。(8) 『胎産書』は流産などによる胎児観察で外性器が形成される時期をほぼ正確に把握していたと考えられた。胎児の成長の記述が、4 ヶ月目の血から始まったのも胎児観察によると考えられた。(9) 『管子』の発育記述は3 ヶ月目・5 ヶ月目・10 ヶ月目だけである。これはつわり・胎動・出産の時期と一致し、妊婦の自覚しやすい症状を記していると考えられた。

南北朝隋唐代の発育記述は『諸病源候論』『千金方』『医心方』所引『産経』に存在し、いずれも『胎産書』系統の内容に別系統の理論が付加され変化・発展したと考えられた。その伝承と発展は以下の通りである。(10) 『胎産書』系の内容からは後世、養胎説が発展していた。養胎法は一般的養生が主であったが、一部には形象イメージや胎教・五行説を援用した方法が説かれていた。(11) 『諸病源候論』『千金方』『産経』で新出の脈論は、『胎産書』と別系の『脈経』から導入され発展していた。その妊娠10 ヶ月間に養われる10 経脈は『素問』以来の六臓六腑に対応する十二経脈と五行説の解釈から作成されている。(12) 『諸病源候論』『備急千金要方』で新出の胎児の発育記述は、『素問』系の臓腑説に由来する可能性が考えられた。これらは『胎産書』の記述に加え、人間に必要な組織を備えさせるためだったらしい。(13) 『千金方』『産経』に存在した新しいタイプの養胎法は、感情・飲食・居所を疾病の原因とする『素問』『靈枢』の病理論の発展と考えられた。

以上の考察より、古代中国の胎児発育記述には胎児観察・妊婦自覚症状の他に、生命発生論・器官形成概念・五行説などの論理根拠が認められた。他方、深く五行説の浸透した『素問』『靈枢』が後世の発育記述に大きな影響を及ぼしたことも理解された。『胎産書』系統の内容のみが後世の医書に受け継がれたのは、五行精を用いる現行五行説に近いたちであったためと考えられる。

## 緒言

妊娠・出産に関して中国最古の記載があるのは、殷墟から出土した甲骨文である。15万片あまりの甲骨文には出産に関する記載が140条あまりあるという<sup>[1]</sup>。胡厚宣は「殷人疾病考」<sup>[2]</sup>で疾病の種類の中に「産病」の項を設け、妊娠中の武丁の妃に病があるかを占う条文をあげている。また胡の「殷代婚姻家族宗法生育制度考」<sup>[3]</sup>には妊娠の有無を診断する条文が数多い。さらに男女の性別も占っており、男では吉、女では凶とされる。男が望まれるのは後継者という意味合いが強いのだろう。このように上古の時代から、妊娠は人々の大きな関心事であったと言える。

戦国秦漢代に至ると、妊娠・出産への興味は妊娠10ヶ月間の胎児の発育過程にも及んでいったようだ。馬王堆から出土した『胎産書』には妊娠10ヶ月間の胎児の成長が記され、さらに各月ごとの養胎法も述べている。同時代の胎児の発育記述は『管子』『淮南子』にもあり、各書の記述は相当に異なる。南北朝隋唐代の発育記述は『諸病源候論』『千金方』と『医心方』所引『産経』にあり、当3書は『胎産書』系統から発展していると考えられる。そこで本稿では戦国秦漢代から南北朝隋唐代の妊娠10ヶ月の記述に焦点をあて、その根拠と論理系統について考察する。なお本稿では、これら妊娠10ヶ月に関する記述を「胎発育説」と呼ぶこととする。

第1章では『胎産書』『管子』『淮南子』を中心に戦国秦漢代の胎発育説について検討し、各書の論理背景を考えたい。第2章・第3章では南北朝隋唐代の胎発育説について考察する。第2章で『胎産書』からの発展を明らかにし、第3章で『胎産書』にない新出内容の思想背景を考察する。最後に結論として各時代の胎発育説をまとめ、なぜ『胎産書』の胎発育説が後代の医書に受け継がれたのか考えたい。

なお考察では、各月の胎児の成長を現代の医学知見と比較することもある。そこで始めに、古代の妊娠幾月の数え方について述べておく。現在、妊娠幾月は最終月経開始日を基準に数えている<sup>[4]</sup>。古代中国では何を基準にしていたのか、それを示す記載はない。ただし古代中国でも月経が一つの目安にはなっていただろう。また『莊子』外篇・天運<sup>[5]</sup>には「民孕婦十月生子」とあり、『胎産書』を含

め本稿で考察する全書で 10 ヶ月目に生まれる事を記していることを考えると、妊娠期間が約 10 ヶ月と認識されていたのは間違いない。とすると妊娠期間を十月十日とする現代の認識とそれほど変わらず、古代と現代の妊娠幾月に大きな差はないと考えられる<sup>[6]</sup>。以上を前提とし検討を行う。

なお本稿で使用する漢字は JIS コード文字にある常用漢字・人名漢字を原則とし、それにない漢字は正字を利用した。出土文献の原文は、各々の注釈書に従い、誤字は（ ）内で改め、欠字は【 】により補っている。また文中に挙げた人名についての敬称は省略した。

## 参考文献と注

- [1]梁晴・蔣秀英「簡論甲骨文中關於生育的問題」『中原文物』1986 年第 3 期（『甲骨文献集成』第 29 冊 313 頁、成都・四川大学出版社、2001 年所収）。
- [2]胡厚宣「殷人疾病考」（『民国叢書』第 1 編 82 卷）上海・上海書店、1989 年。
- [3]胡厚宣「殷代婚姻家族宗法生育制度考」（『民国叢書』第 1 編 82 卷）上海・上海書店、1989 年。
- [4]T.W. Sadler 著・沢野十蔵訳『ラングマン人体発生学：正常と異常』69 頁、東京・医歯薬出版、1987 年。
- [5]『南華真經』卷 5（『四部叢刊初編』子部、上海・商務印書館、出版年不明）。
- [6]10 ヶ月を出る記述がないことからすると、先秦代から漢代の妊娠幾月の数え方は現代より 1、2 週少ない可能性がある。

## 第 1 章 戦国秦漢代の胎発育説

妊娠、特に生命の発生については多くの古典籍で取り上げられているが、本章では『胎産書』・『管子』水地篇・『淮南子』精神訓を中心に考察を行いたい。当

3 書を用いるのは戦国秦漢代成立の書で現存最古の記述に属し、胎児の状態や成長過程が各月ごとに記されているからである。なお『胎産書』は胎児の成長だけでなく、妊婦の修身法や男女の生み分け方も記されているが、本章で詳しくは触れない。第 2 章で後世に影響を与えた医書と共に考察する。

## 1 『胎産書』

『胎産書』は 1971 年、中国湖南省の省都・長沙の東郊にある馬王堆三号漢墓から出土した。当書は帛書で、ほぼ正方形、上半分には二つの図が、下半分には文字が書かれている。

上の図の一つは「南方禹藏」と名があり、「えな」を埋める方位を決めるために用いるようである。もう一つは欠損が激しいが、同類の図が 1975 年に湖北省の雲夢で発見された『睡虎地秦墓竹簡』の『日書』に「人字」という名で存在する<sup>[1]</sup>。

『胎産書』下半分の文字部分は計 34 行から成り、馬によると現存文字数は 679 字、原書の推定総文字数は 1000 字である<sup>[2]</sup>。前半に妊娠 10 ヶ月間の胎児の成長や妊婦の修身法、後半に「えな」の埋め方、男女の生み分け方などが書かれている。

本稿では主に前半部分についてとりあげ、必要に応じて後半部分もふれる。考察には文物出版社の『馬王堆漢墓帛書 [肆]』中の『胎産書』釈文・注釈<sup>[3]</sup>を使用した。なお当該書では欠損部が可能な限り補われている。

### (1)成立

『胎産書』が出土した馬王堆漢墓からは、湿屍状態で婦人の遺体も発見されている。この婦人はその後の調査で、紀元前 168 年から数年以内に死亡していることが明らかになっており<sup>[4]</sup>、同時に埋葬された『胎産書』の成立はそれ以前ということになる<sup>[5]</sup>。また当書の字体は『睡虎地秦墓竹簡』に似ているという<sup>[6]</sup>。睡虎地秦墓に埋葬された人物は紀元前 217 年前後に死亡していると推測されるため<sup>[7]</sup>、『胎産書』の成立はそこまで遡る可能性がある。

『胎産書』の冒頭は「禹問幼頻、我欲（殖）人産子、何如而有。幼頻（答）曰、月朔已去汁口、三日中従之、有子」と、人はどのようにして生まれるのかを禹が幼頻に問う形で始まる。幼頻は問いに対して、「月経が終わって3日以内に房事をすれば子供ができる」と答えているから、月経が生殖と受精の時期に関連があるという認識はすでにあったことがわかる。その後、1ヶ月目から10ヶ月目まで、以下のように各月ごとの胎児について記述がある。

毋使侏儒、不觀（沐）（猴）、不食（葱）姜、不食兔羹、□欲產男、置弧矢、  
□雄雉、乘牡馬、觀牡虎。欲生女、佩（簪）（珥）、（紳）（珠）子、是謂內象  
成子。

十月氣陳□□、以為．．．

6

きない。特に 3 ヶ月目までは流産の危険性も高いとされ<sup>[8]</sup>、そうした胎児を見る機会があったのではなかろうか。このような視点で『胎産書』3 ヶ月目・4 ヶ月目の記述を検討してみたい。

3 ヶ月目の記述は、前半部分以外に後半部分にも見られる。当該部分を下に示す。①は『胎産書』前半部分の胎發育説の 3 ヶ月目の記述、②③が後半部分の記述である。

①三月始脂、果隋宵效、当是之時、未有定（儀）、見物而化、是故君公大人、毋使侏儒、不觀（沐）（猴）、不食（葱）姜、不食兔羹、□欲産男、置弧矢、□雄雉、乗牡馬、觀牡虎。欲生女、佩（簪）（珥）、（紳）（珠）子、是謂内象成子。

②懷子未出三月者、（吞）爵饗二、其子男（也）。

③一曰、以方（咀）時、取蒿、牡、（蜚）（蛸）三、治、飲之、必産男。

③の「咀時」とは後述の『管子』水地篇で胎児を「三月而咀」<sup>[9]</sup>としていることから、3 ヶ月目のことと考えられる。さて①では、男が欲しい場合と女が欲しい場合、「見物而化」として各々の見るべき物を示している。②③では男児を産む術を 3 ヶ月以内、もしくは 3 ヶ月目に行う方法である。この記述からすると、『胎産書』は 3 ヶ月目に男女が分れると認識していたと推定できる。一方、現代の医学知見によれば胎児の外性器が妊娠 10 週目ごろに外部に現われ、14 週目、つまり 4 ヶ月目前半には性別の判断が可能となる<sup>[10]</sup>。つまり性別に関する『胎産書』の認識は、現在の医学見解とほぼ一致している。

後代の医書では、『諸病源候論』『千金方』および『医心方』所引『産経』などに、3 ヶ月目に男女の生み分け方が記されている。すなわち『諸病源候論』『千金方』では、「是之時男女未分、故未満三月者、可服薬方術転之、令生男也」<sup>[11]</sup>



10 週目前後の胎児。外性器がみえる。

出典：『こうして生まれる』234 頁、  
東京・ソニーマガジズ

[12]と、3 ヶ月目を過ぎる前に胎児を男にするため服薬・方術を指示する。さらに「診其任娠四月欲知男女」[13]とあり、4 ヶ月目には性別の判断が可能になることを記す。加えて『諸病源候論』『千金方』および『医心方』所引『産経』には流産や墮胎に関する記述もあり[14]、実際に各月の胎児を観察していたことはほぼ間違いない。それでも性別の判断について第2章に記す後世の諸医書で新たな観点が付加されなかったのは、『胎産書』の3 ヶ月目の記述がおおよそ正確なもの、と歴代再確認されていたことを示唆するだろう。



10 週目の胎児。血管が透けて見える。

出典：『こうして生まれる』179 頁、東京・ソニーマガジンズ

次に4 ヶ月目だが、『胎産書』は当月に「始成血」と記述する。血が主要な身体器官の一つだったであろうことは、周代の官制を記録したという『周礼』瘍医の骨・筋・脈・気・肉・竅<sup>[15]</sup>、馬王堆出土『陰陽脈死候』の肉・骨・気・血・筋<sup>[16]</sup>、張家山出土『脈書』の骨・筋・血・脈・肉・気<sup>[17]</sup>などのまとまった身体器官の記述に、必ず血が存在することからも明らかである<sup>[18]</sup>。しかし2 ヶ月目の膏、3 ヶ月目の脂、4 ヶ月目の血、5 ヶ月目の気、6 ヶ月目の筋という『胎産書』の生成順の中

で、気より先に血ができることを気一元説では十分に説明できない。ところで実際の観察によると4 ヶ月目の胎児は皮膚が薄く、血管が透けて見える<sup>[19]</sup>。すると『胎産書』の「始成血」は、この様子から記述された可能性も否定できない。そうだとするなら、4 ヶ月目の記載も流産による胎児観察を強く示唆している。

では現代の知見とほとんど一致しない5 ヶ月目以降の胎児の発育記述は、どのようにして導き出されたのだろうか。

### (3) 五行説との関係

『胎産書』の4 ヶ月目から9 ヶ月目における胎発育説で身体器官の成長は、それぞれ水火金木土石の精を授けて始まると記される。さらに各精は9 ヶ月目の



石の精を除けば、五行説の五行そのものである。これらを勘案すると4ヶ月目の胎観察を基準に、流産の頻度が減少する5ヶ月目以降の発育を五行説を用いて述べた可能性が高いと推測できる。そこで、各精と各器官の関係を五行説から考えてみたい。

五行説は様々な事象に当てはめられるため、身体器官も五行にあてはめることができる。以下の表1に身体器官の五行配当を示す。なお当表は原型が後漢代に編纂された医学古典『素問』<sup>[20]</sup>に基づき整理した。

[表1]『素問』による身体器官の五行配当表

	木	火	土	金	水	出典
器官	筋	血	肉	皮毛	骨髓	陰陽応象大論篇第5
	筋	血	肉	気	骨	宣明五気篇第23
	筋膜	血脈	肌肉	皮毛	骨	痿論篇第44

他方、『胎産書』の各精と身体器官の関係は水－血、火－気、金－筋、木－骨、土－膚革、石－毫毛で、表1と比べると大きく異なっている。他に相生説・相克説の関係も検討したが当てはまらない。しかし、五行と身体器官で『胎産書』と同様の組み合わせを持つ記述はいくつか存在し、『管子』四時篇<sup>[21]</sup>には次の文章がある。

東方曰星、其時曰春、其気曰風、風生木与骨、…、南方曰日、其時曰夏、其気曰陽、陽生火与気、…、中央曰土、土徳実輔四時入出、以風雨節土益力、土生皮肌膚、…、西方曰辰、其時曰秋、其気曰陰、陰生金与甲、…、北方曰月、其時曰冬、其気曰寒、寒生水与血、…

当記述は『胎産書』と水－血、火－気、木－骨が一致する。また『胎産書』土－膚革、金－筋が『管子』では土－皮膚、金－甲になっているが、膚革と皮膚は、同じとしてよいだろう<sup>[22]</sup>。また甲は爪の意味であり、『素問』五蔵生成論篇第10<sup>[23]</sup>の「肝之合筋也。其栄爪也」と、筋と爪の関係を説く記述からすると、『胎産書』の金－筋も『管子』の金－甲と合致する。

さらに『周礼』の瘍医<sup>[24]</sup>には次の記述がある。

凡薬、以酸養骨、以辛養筋、以鹹養脈、以苦養気、以甘養肉、以滑養竅。

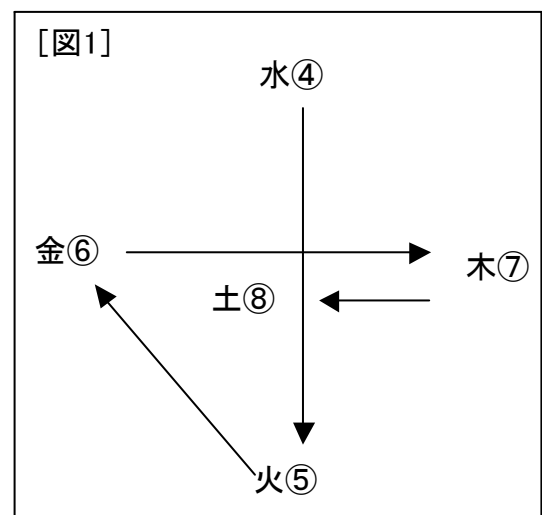
当文は六味（酸辛鹹苦甘滑）の作用を述べたものである。五味と五行の配当に変化はないとされるので<sup>[25]</sup>、当文の五味から五行を考えると、各器官との関係は、木－骨、金－筋、水－脈、火－氣、土－肉となる。この関係は『胎産書』の五行精と身体器官の関係である木－骨、金－筋、火－氣と一致する。水－脈、土－肉は『胎産書』で水－血、土－膚革となるが、ともに同様の関係と見なすことができる<sup>[26][27]</sup>。

滑－竅と石－毫毛の関係について林<sup>[28]</sup>は、竅は体の内外を通じる穴であり、『胎産書』の毫毛は皮膚から外に向かって生えるもので、やはり体の内外を通じると、共通点を指摘している。一方、『周礼』の五味と身体器官の対応について、鄭玄は「以類相養也。酸、木味。木根立地中似骨。辛、金味。金之纏合異物似筋。鹹、水味。水之流行地中似脈。苦、火味。火出入無形似氣。甘、土味。土含載四者似肉。滑、滑石也。凡諸滑物通利往来似竅」<sup>[29]</sup>とし、五味に対応する五行と身体器官が各々、似た形態や性質を持っていることを説明している。とすれば『胎産書』の五行＋石の精と身体器官の対応もまた、形態や性質の類似を根拠としていると言える。『周礼』の水－脈、土－肉は『胎産書』で水－血、土－膚革となるが、水と血はともに液体で相似すると言え、人体の表皮を含む膚革と地表にある土もまた相似している。石と毫毛の関係では、石に生える苔などをイメージしたとも考えられる<sup>[30]</sup>。

以上のことから『胎産書』の成長器官と水火金木土石の関係は、現行の五行説とは明らかに異なるものの、『管子』『周礼』にも存在する配当であることが分かった。『管子』四時篇について金谷は戦国末期の資料とし<sup>[31]</sup>、『周礼』も戦国時代から前漢末期までの成立とされ、ともに

『胎産書』とほぼ同時代の記述と考えられる。つまり当時、現行五行説とは異なる配当が存在し、ある程度広く受け入れられていたことを推測させよう。その配当に基づき4ヶ月目の血管が透けて見える胎児の状態を、「四月而水授之、乃始成血」と表現したのであろう。

ところで、五行精を受ける『胎産書』の順番は水→火→金→木→土→石で、図示すると



右のようになる。通常、五行は五角形で表すが、本稿では土を中央に置く四角形の五行図を用いた。また図中の④～⑧の数字は妊娠幾月目かを表している。この図を見ると、各月で受ける五行精の順次は五行相克（土克水、水克火、火克金、金克木、木克土）に近い形をとっていることがわかる。土克水の形がないのは、五行には含まれない石の精が加わったためであろう。つまり、5ヶ月目以降の記述は五行相克説に基づき、順に五行精と対応する身体器官をあてていったと考えられる。しかし4ヶ月目から五行精で成長を述べると8ヶ月目で終わってしまうため、9ヶ月目に石を用い六としたのではないだろうか。では五行の水火金木土に石を加えた記述は他にあるのだろうか。

#### (4)六つの要素

水火金木土石という六要素の組み合わせは、緒言にあげた古医籍の胎發育説のみに見える。しかし六要素を示す記載は存在する。『春秋左伝』文公伝七年<sup>[32]</sup>では水火金木土穀を六府といい、類似同容の『尚書』大禹謨<sup>[33]</sup>でも民を養う一つに水火金木土穀をあげる。これらは『胎産書』の水火金木土石と、石と穀の語が異なるだけである。『尚書』の孔疏は、『尚書』が穀を加えて六府とするのは、穀が民に最も重要で、穀は土から生じるので土の後に穀をおくとする<sup>[34]</sup>。これに従えば『胎産書』の石も土中にあるので、土と関連すると言えよう。さらに林は次のように説明する<sup>[35]</sup>。

まず穀に必要な雨と、雨を願う社の形態が石であること。また女禍は雨に関係しており、石から生まれたとされる禹や啓とも関係の深いこと。天を石で補修したという話があること。これらより、林は石と穀がつながるという。他に石と穀の関係は見出し難いが、石が天と関係する点に注目したい。他方、成立に陶弘景が関係するらしい敦煌文書の『輔行訣臟腑用藥法要』には、陰旦・陽旦・青龍・白虎・朱雀・玄武の名を冠した処方があり、「此六方者、為六合之正精、升降陰陽、交互金木、既濟水火、乃神明之劑也」と記し<sup>[36]</sup>、明らかに天地四方の概念が認められる。林も様々な六要素が天と関わりのあることを説明している<sup>[37]</sup>。

ところで前述のように、『周礼』の瘍医には六味が記述がされ、それは『胎産書』の五行精と身体器官の関係とほぼ一致していた。滑一竅と石一毫毛の関係も上述したとおりである。

以上のように五行＋石の記載は漢以前の文献に見えないものの、五行の一つを加えた六の概念は少なくない<sup>[38]</sup>。また穀や滑は石と何らかの関係が認められた。

ではなぜこのような六の概念が生まれたのであろうか。筆者は五つの要素では説明しきれない事象があったためではないかと推測したい。『左伝』や『尚書』の穀は民に最も重要なものであった。『周礼』の滑に関して、村上は滑をトロミのこととし、当時の食感は、トロミや粘りのある食品を好む傾向にあったのではないかと述べる<sup>[39]</sup>。他方、天地四方の六方はごく自然な着想であり、六の概念は利用しやすい。そのため、五の要素で論述できなかった場合に六の概念が使われたと考えられよう。『胎産書』が水火金木土石の六要素を用いたのもそういった理由であったと考えられる。すなわち『胎産書』は、胎児観察により4ヶ月目から血の生成を述べた。それ以降の成長を五行相克説で説くが、それでは8ヶ月目で終わってしまう。このため当時存在していた六の概念を用い、9ヶ月目に石で説明したのである。

## 2 『管子』水地篇

水地篇について金谷は、とくに水をたたえる1篇の文章として『管子』の中だけでなく、広く中国の古典一般のなかでも著しい特色を備えていると認められる篇であるとする<sup>[40]</sup>。当篇にも胎発育説が記されるので同様に検討を加える。

### (1) 成立年代

『管子』の著者とされる管仲は春秋時代、斉の宰相であったとされる。紀元前7世紀前後のことである。しかし現在の『管子』が多年に亘って成立した書であることは広く知られている。では水地篇の成立はいつごろであったのだろうか。

郭沫若は、水地篇の後半で斉・楚など各地の水質と国民性の関係を述べ、特に楚と宋について好意的に書かれているため、西楚の項羽が都を彭城に定めたときのもので、五徳終始説にもとづく水徳の讃美であるとする<sup>[41]</sup>。羅根沢は、五味と五臓の関係が説かれる点から前漢初の医家の作とする<sup>[42]</sup>。金谷は、羅根沢の医家の作とすることに疑問を唱えてはいるものの、前漢初の編成と見ている<sup>[43]</sup>。

以上の見解に基づき、広く秦漢の際から前漢初期にかけての成立と考えておく。

## (2)『管子』水地篇の医学知見

『管子』水地篇<sup>[44]</sup>は、水を万物の根源として水の特性を述べ、胎児發育についても「人、水也」とし、以下のように發育過程を記述する。

人、水也。男女精氣合、而水流形。三月而<sup>[45]</sup>咀。咀者何、曰五味。五味者何、曰五藏。酸主脾、鹹主肺、辛主腎、苦主肝、甘主心。五藏已具、而後生五内<sup>[46]</sup>。脾生隔<sup>[47]</sup>、肺生骨、腎生腦、肝生革、心生肉。五内<sup>[48]</sup>已具、而後發為九竅。脾發為鼻、肝發為目、腎發為耳、肺發為口<sup>[49]</sup>、心發為下口<sup>[50]</sup>。五月而成、十月而生。

この發育の記述は妊娠 3 ヶ月目、5 ヶ月目、10 ヶ月目にあるのみで、『胎産書』と大きく異なる。また身体器官の成長記述は 3 ヶ月目にしかない。『胎産書』は流産した胎児の観察から、3、4 ヶ月目の胎児についてある程度正確な知識を得ていたらしいことは 1 節で述べた通りだが、『管子』水地篇の胎發育説にも正確な知識をもとにした記述は存在するのだろうか。

『管子』の胎發育説では妊娠 3 ヶ月目に五味と五臓の関係を説き、次に五つの器官（五内）ができ、九竅ができる過程を述べる。しかし現実ほとんどの器官が 1、2 ヶ月目中に発生するため<sup>[51]</sup>、『管子』の發育記述が現実的知識をもとにした可能性は低い。そこで發育の記述を除いた内容について考えたい。『管子』水地篇から五臓・五内・九竅などの發育記述を除くと以下の記述になる。

三月而咀。咀者何、曰五味。五月而成。十月而生。

まず 10 ヶ月目の「生」だが、出産を意味することは明らかである。

次に 3 ヶ月目の「咀」だが、『管子』以外でこのような記述は、『胎産書』に「一曰、以方（咀）時、取蒿・牡・（蜚）（蛸）三、治、飲之、必産男」<sup>[52]</sup>とあり、男児を出産するための薬を飲む時期を「咀時」と示している<sup>[53]</sup>。1 節の(1)で述べた通り、『胎産書』には男児を産むための薬や方術についての記載が他にもあった。それらの記載は全て 3 ヶ月目に服薬や方術を行うと明記しているため、「咀」も 3 ヶ月目を示す特徴的な言葉であったと考えられる<sup>[54]</sup>。ところが後代の医書には妊娠 3 ヶ月目を「咀」で表す記述がなく、当月に「咀」を用いた文もまた存在しない。他方、南北朝隋唐代の医書は妊娠中の様々な症状を記載し、妊

娠 3 ヶ月目は以下のように「悪阻」の症状が見られるとする。

- ・集驗方云、任身二三月、悪阻、嘔吐不下食方…（『医心方』巻 22）<sup>[55]</sup>
- ・悪阻病者心中憤悶、頭眩四支煩疼懈墮、不欲執作惡聞食氣、欲噉鹹酸果実、多睡少起。世云惡食、又云惡字是也。乃至三四月日以上、大劇者不能自勝拳也（『諸病源候論』巻 41）<sup>[56]</sup>
- ・阻病者、患心中憤憤、頭重眼眩、四肢沈重懈惰、不欲執作、惡聞食氣、欲啖鹹酸果実、多臥少起、世謂惡食。其至三四月日以上、皆大劇吐逆、不能自勝拳也（『備急千金要方』巻 2）<sup>[57]</sup>

「悪阻」について各書とも、心が乱れる、頭が重い、めが眩む、体が重い、食べ物の臭いを嫌う、塩辛い味や酸味のある果物を好むようになると説明しており、現代の「つわり」の症状であることがわかる<sup>[58]</sup>。症状が出る時期は 2、3、4 ヶ月目のいずれかで、これも「つわり」の時期と一致している<sup>[59]</sup>。

ところで悪阻の「阻」は、「三月而咀」の「咀」と音通する<sup>[60]</sup>。また古代でも現代でも「阻」は「沮」に通じる<sup>[61]</sup>。『胎産書』と同じく、馬王堆から出土した『五十二病方』<sup>[62]</sup>には、「皆以甘口沮而封之」と、「咀」の意味で「沮」を用いている。「沮」が「阻」と通じることを考えると、「咀」と「阻」も同じ意味で使われていた可能性が考えられる。上に引用した『備急千金要方』のつわりの記載に「阻病」とあることから、阻だけでも悪阻を意味すると言える。つまり『管子』の 3 ヶ月目および『胎産書』の「咀」は、悪阻の「阻」を意味している可能性が高い。

5 ヶ月目「五月而成」の「成」も妊娠の症状から考えてみたい。現代医学では、当月を妊婦が胎動を感じ始める時期とする<sup>[63]</sup>。胎動の記載もやはり後代さまざまな書に見られる。『備急千金要方』には「妊娠五月有熱基頭眩、…胎動無常処」「妊娠六月卒有所動不安」<sup>[64]</sup>とある。他に、『外台秘要方』所引『小品方』では「小品療妊娠五月日挙動驚愕動胎不安下在小腹痛…」<sup>[65]</sup>としている。同様の記述は他にもあり<sup>[66]</sup>、幾月目かは各書によって異なっている。これは胎動が 5 ヶ月目頃から現われ出産間際まで続くので、期間を固定しづらかったためと考えられる。いずれにせよ、『備急千金要方』や『外台秘要方』所引『小品方』のように、胎動もほぼ正確に捉えられていたことが分かる。

胎動と「成」の関係だが、5 ヶ月目は胎児が著しく成長し、急激に腹部が大き

くなる時期でもある<sup>[67]</sup>。急激に大きくなる腹部や胎動から「成」と表現しても何ら不思議はない。

このように現代の医学知見と比較すると、前掲の各書ではつわりや胎動の症状を、かなり正確に把握していたことが分かる。つまり、極めて分かりやすい症状であったということだろう。つわりや胎動の記載があった各書は、他に便秘や頻尿・腹痛・腰痛など様々な妊娠中の症状をあげる。しかし幾月目かを明記しているのがつわりと胎動だけであるのは、それを如実に表している。すでに述べた通り、古代中国と現代の妊娠幾月の数え方はそれほど大きな開きはなかったはずだ。また妊娠中の症状も変わるはずがない。以上のことから『管子』の「三月而咀。五月而成」の記述は、妊婦が自覚しやすい妊娠の症状を記したと考えられる。

では身体器官の発育についてはどのように考えられていたのだろうか。

### (3) 五行説との関係

『管子』の胎発育説に見えるような五味と五臓の関係や五臓と人体器官の関係は、『素問』に論説が少なくない。例えば『素問』陰陽応象大論篇第 5<sup>[68]</sup>には次のようにある。

東方生風、風生木、木生酸、酸生肝、肝生筋、筋生心、肝主目。…南方生熱、熱生火、火生苦、苦生心、心生血、血生脾、心主舌。…中央生濕、濕生土、土生甘、甘生脾、脾生肉、肉生肺、脾主口。…西方生燥、燥生金、金生辛、辛生肺、肺生皮毛、皮毛生腎、肺主鼻。…北方生寒、寒生水、水生鹹、鹹生腎、腎生骨髓、髓生肝、腎主耳。…

これを『管子』の胎発育説と比べると、味と臓腑の関係、臓腑と器官の関係、臓腑と九竅の関係、これら全てが一致しない。しかし上例以外にも論説は多く、五味と五臓の関係については真柳の考察がある<sup>[69]</sup>。その一例を表 2 にまとめた。表 2 の『管子』水地篇の配当は五味を仲介にして整理したが、五臓の五行配当は一説ではないため、今文説・古文説および『淮南子』地形訓<sup>[70]</sup>の記載も併記した。すると『管子』の五臓の配当はいずれの場合とも一致せず、最も近い古文説ですら木と土の臓のみ合致するにすぎない。

〔表 2〕 五味と五臓の関係（五行配当）

	木	火	土	金	水
今文説	肝	心	脾	肺	腎
古文説	脾	肺	心	肝	腎
『管子』水地篇	脾	肝	心	腎	肺
『淮南子』地形訓	肝	心	胃	肺	腎

同様に表 3 には各身体器官の五行配当、表 4 には九竅の五行配当を示した。『管子』の身体器官と九竅は、表 2 に基づき五行の同位で配当した。表 3 でも『管子』の器官と五行配当は他書のそれと完全に一致するものではなく、土の肉と水の骨が『素問』の一部の記載と合うだけだった。表 4 では各書の記載が一つとして一致しない。またこれらの記載を相生関係・相剋関係で検討しても所説の一致は見出せない。

〔表 3〕 器官の五行配当

	木	火	土	金	水
『素問』〔i〕	筋	脈	肉	皮毛	骨
『素問』〔ii〕	爪	面	唇	毛	髮
『素問』〔iii〕	血	神	肉	氣	志
『胎産書』	骨	氣	膚革	筋	血
『管子』〔iv〕	隔	革	肉	腦	骨

〔i〕金匱真言論篇第 4 〔ii〕六節藏象論篇第 9 〔iii〕調經論篇第 62 〔iv〕水地篇

〔表 4〕 九竅の五行配当

	木	火	土	金	水
『素問』〔i〕	目	耳	口	鼻	二陰
『素問』〔ii〕		舌			耳
『管子』〔iii〕	鼻	目	耳	口	下口
『淮南子』〔iv〕	口・耳			目	鼻

〔i〕金匱真言論篇第 4 〔ii〕陰陽応象大論篇第 5 〔iii〕水地篇 〔iv〕精神訓



すなわち『管子』の五味・五臓・九竅の関係は現行の五行説では説明できず、古代の類似記載にも同じ配当や関連の思想は述べられていない。これは古代には五行の様々な配当が存在したことを十分に窺わせる。

一方、林は水地篇で水の味を「淡也者、五味之中也」としていることから、水地篇の五味は五行説の五味と異なり、五行説の枠外にあるものとしている<sup>[71]</sup>。現在に知られない思想が存在した可能性も考えていいだろう。

#### (4)身体構成器官

次に身体器官に注目してみよう。『管子』には鼻・目・耳・口・二陰と九竅が記されていた。九竅の五行配当は後世の説と異なっているが、九竅として鼻・目・耳・口・二陰を指すことは問題ない。他方、身体構成器官として、隔・骨・脳・革・肉を記すのは特異である。隔は後述のように横隔膜とされるが、身体構成要素として骨や肉とともに脳や横隔膜が記されることは他の文献に見えない。すでに述べたが、例えば『胎産書』に記された身体器官は血・気・筋・骨・膚革・毫毛だった。同じく馬王堆出土の『陰陽脈死候』には、死に至る病として肉・骨・気・血・筋の症状を述べる<sup>[72]</sup>。張家山出土の『脈書』はまとまった身体器官として、骨・筋・血・脈・肉・気を記す<sup>[73]</sup>。さらに『周礼』天官・瘍医には、薬の五味（実際は六味）が骨・筋・脈・気・肉・竅へ作用することを説く<sup>[74]</sup>。以上の記載にまとまって現われる身体器官を表5にまとめた。

〔表5〕諸書に列記される身体器官

『胎産書』	血	気	筋	骨	膚革	毫毛			
『陰陽脈死候』	血	気	筋	骨	肉				
『脈書』	血	気	筋	骨	肉		脈		
『周礼』〔i〕		気	筋	骨	肉	竅	脈		
『管子』〔ii〕				骨	肉・革			隔	脳

〔i〕瘍医    〔ii〕水地篇

表 5 に見られるごとく、身体構成器官から何と何を代表的器官として列挙するかはいくつかのパターンがある。しかし隔や脳がその中に入ることは『管子』以外に見られない。脳と隔を古代では如何に認識していたのだろうか。

『史記』扁鵲倉公列伝<sup>[75]</sup>に、「氣鬲病」の記述がある。似た症状は『靈樞』上膈第 68<sup>[76]</sup>に、「氣為上膈者、食飲入而還出」とあり、馬蒔は横隔膜のこととする<sup>[77]</sup>。また『素問』刺禁論篇第 52<sup>[78]</sup>には「鬲盲之上、中有父母」とあり、森立之らは鬲盲をやはり横隔膜のことと判断している<sup>[79]</sup>。盲について『左伝』成公十年<sup>[80]</sup>に「医至曰、疾不可為也。在盲之上、膏之下、攻之不可。達之不及、藥不至焉。不可為也」とあり、この盲・膏もまた横隔膜とされる。他に『素問』『靈樞』には横隔膜を意味する隔・膈・鬲の記述が多数あり、その認識が古くからあったことは疑いない。

脳の記述もまた多数ある。『史記』劉敬叔孫通列伝<sup>[81]</sup>には「使天下之民肝腦塗地」と、肝と脳が地面にまみれる形容をする。『左伝』僖公二十八年<sup>[82]</sup>には「晋侯夢与楚子搏、楚子伏己而盥其腦」とあり、脳は液体的なイメージで捉えられていた。『史記』扁鵲倉公伝<sup>[83]</sup>には「乃割皮解肌、腧脈結筋、搦髓腦、揲荒爪幕、湔浣腸胃漱滌五藏、練精易形」と、治療で髓腦を押さえたことを記す。『素問』『靈樞』では「腦為髓之海」<sup>[84]</sup>「諸髓者皆屬於腦」<sup>[85]</sup>とあるように、脳を髓の貯蔵庫とする<sup>[86]</sup>。脳の認識もまた古くからあったと考えてよい。

以上のことから、身体構成器官として横隔膜や脳が入ることも特異ではないと確認できる。すると表 5 にまとめた『管子』水地篇と他文献における身体構成器官の違いは何に由来するのだろうか。水地篇の冒頭に「地は万物の本原、諸生の根莖なり」とあり、「水は地の血氣」という。言い換えれば、水（＝血氣）が諸生（＝人）の基盤ということである。そして「人は水なり」と説き、「男女精氣合して水形を流く」と述べる。地にとっての水は人にとっての血氣であるから、「水形を流く」とは血氣が形をなしていくことと理解されよう。とすれば表 5 で他書が身体構成器官に挙げる血・氣は、『管子』水地篇の思想中ですでに存在することとなる。そのため血・氣の代りに脳と横隔膜が加わったのではないだろうか。林は『管子』水地篇で脳や隔といった器官が言及されることについて「社会一般における身体観と医学的な身体観の相違に由来すると考えられる」と述べている<sup>[87]</sup>。この身体観の相違は、『管子』水地篇が生命の根源を血氣とする思想

で叙述するためと理解されよう。

### 3 『淮南子』

#### (1)精神訓の胎發育説

『淮南子』では精神訓に胎發育説があり、精神訓の「精神」を高誘は「精者人之氣、神者人之守也」<sup>[88]</sup>とする。「精神」は胎發育説の前に、「夫精神者所受於天也、而形軀者所稟於地也」と形体と対照的に用いられていることから、高誘がいうように氣のごとき存在で、生命の根源を意味すると考えられる。

当篇の胎發育説は以下の通り、1ヶ月目から10ヶ月目まで胎児の状態や生長を簡潔に記している。

夫精神者所受於天也、而形軀者所稟於地也。故曰、一生二、二生三、三生万物。万物背陰而抱陽、冲氣以為和。故曰、一月而膏、二月而肤、三月而胎、四月而肌、五月而筋、六月而骨、七月而成、八月而動、九月而躁、十月而生。

形体以成、五臟乃形。是故肺主目、腎主鼻、胆主口、肝主耳、脾主舌。

当記述は『管子』の胎發育説と同様、五臟と九竅の関係（肺一目、腎一鼻、胆一口、肝一耳、脾一舌）を説いている。しかし組み合わせは『管子』（肺一二陰、腎一耳、心一口、肝一目、脾一鼻）と一致せず、『素問』『靈樞』などに見られる五臟と九竅の関係（例えば肺一鼻、腎一耳、心一舌、肝一目、脾一口）とも一致しない（2節の表4参照）。また『淮南子』の胎發育説は、『胎産書』や『管子』に比べて身体器官の記述が少ない。九竅と五臟を除くと、身体器官の記述は4ヶ月目の肌、5ヶ月目の筋、6ヶ月目の骨のみである。

『胎産書』に見られた發育器官の血・氣・筋・骨・膚革・毫毛は、2節の表5の通り他書にまとまって現われる身体器官と毫毛を除き共通していた。つまり血・氣・筋・骨・膚革は一般的な身体構成器官であったと言える。『管子』の發育器官は『胎産書』に見えた血・氣が消え、隔と腦が加わっていた。これは生命の根源を血氣とする思想に由来すると考えられた。他方、『淮南子』の肌・筋・骨は一般的身体構成器官に含まれているものの、明らかに少ない。これは『胎産書』や『管子』とは異なる身体観に基づくことを示唆している。それはどのよう

な考えであったのだろうか。

『淮南子』で胎発育の記述は精神訓にしかないが、人類・鳥類・獸類・魚類・亀類の発生に関する記述が地形訓<sup>[89]</sup>に存在する。(以下の＝は穴＋友の字)

＝生海人、海人生若菌、若菌生聖人、聖人生庶人。凡＝者、生於庶人。

羽嘉生飛竜、飛竜生鳳皇、鳳皇生鸞鳥、鸞鳥生庶鳥。凡羽者、生於庶鳥。

毛犢生応竜、応竜生建馬、建馬生麒麟、麒麟生庶獸。凡毛者、生於庶獸。

介鱗生蛟竜、蛟竜生鯢鯁、鯢鯁生建邪、建邪生庶魚。凡鱗者、生於庶魚。

介潭生先竜、先竜生玄竜、玄竜生靈龜、靈龜生庶龜。凡介者、生於庶龜。

当記述によると各生物は 5 段階の進化を経ている。第 1 段階で人類は＝、鳥類は羽嘉、獸類は毛犢、魚類は介鱗、亀類は介潭とされる。第 2 段階になり、鳥類・獸類・魚類・亀類は飛竜・応竜・先竜・蛟竜と竜の名を冠する生物となり、人類も海人と海が名につくから、各々水に関係する生物となるのだろう。第 3 段階の、鳳皇の鳳はオオトリ、建馬はウマの名が付き、鯢鯁の鯢は大きい魚の意味があり、玄竜の竜はスッポンである。以上を勘案すると当段階は各類の特徴を備えた生物と言えよう。若菌の意味は理解しがたいが、平岡は若水の菌人とする。若水とは南方の川で、菌人の記述は『山海経』大荒南経にあり、半人間のような存在であるという<sup>[90]</sup>。第 4 段階は第 3 段階からさらに進化し、聖人・鸞鳥・麒麟・建邪・靈龜となる。聖人・麒麟・靈龜の名から考えると、各類の最高位の生物と考えられる。そして第 5 段階で一般的な人・鳥・獸・魚・亀となる。最後の段階は、各類から様々な種が生じることを意味しているのだろう。

上記したような各類の発生過程で、注目すべきは第 1 段階である。各類の始祖とも言うべき＝・羽嘉・毛犢・介鱗・介潭は、名前から考えるに、羽・毛・鱗・介（甲のこと）と各類の特徴を持つ生物であることがわかる。人類の＝を、高誘は「＝人之先人」とし、俞樾は「両＝字皆肱字之誤」としている<sup>[91]</sup>。肱には股の細かい毛・うぶげ・細い毛の生えた皮膚という意味があり<sup>[92]</sup>、薄い毛をもつ生物となろう。つまり各々の始祖の名は体の表面を指している。当記述について平岡禎吉は、全ての動物は先ず形体の外郭が形成され、順次内部の構造が発達、整備されるという考えによるものとする<sup>[93]</sup>。平岡は同様の考えとして『大戴礼記』曾子天円篇<sup>[94]</sup>の「毛虫毛而後生、羽虫羽而後生」をあげており、生物は発生の始めに外郭からできあがるという思考が当時あったことは確かである。

あらためて精神訓の記述に戻りたい。1ヶ月目から3ヶ月目の膏・肤・胎は、形成が始まる前の流動的な胎児の状態を示している。4ヶ月目の肌は肉の意味もあるが、『釈名』釈形体<sup>[95]</sup>に「肌、懐也。膚幕堅懐也」とあり、外皮の意味もある。とするならば4ヶ月目の肌、5ヶ月目の筋、6ヶ月目の骨という形成順は外側から内側という発育過程であり、地形訓に記された生物の発生過程と共通する。また、10ヶ月目の記述の後に注目したい。「形体以成、五臓乃形」とある。これは「五臓」すなわち体内の器官が、「形体」すなわち外郭の形成後に始まるという意味であろう。『淮南子』では7ヶ月目に「七月而成」とあるから、肌・筋・骨という身体器官が「形体」を意味するのは明らかである。要するに肌が肉の意味であったとしても、体の形を作るという意味で肌・筋・骨は外郭の構成要素と認識されていたとも考えられる。

以上から、精神訓の胎発育説は地形訓の生物の進化と同様、外郭から内部という成長過程を示していると考察された。

## (2)『淮南子』胎発育説の発展

ところで、『淮南子』と類似の記述は後世に受け継がれていく。『淮南子』から発展したと考えられる記載は、古代漢語の語彙集『広雅』<sup>[96]</sup>、六朝時代の偽撰とされる『文子』<sup>[97]</sup>、『素問』『靈樞』の古態を保つ『太素』にある。なお『太素』の現伝本に当該記述はないが、『太素』の佚文を引く『医心方』巻24知有子法第2<sup>[98]</sup>にある。『本邦残存典籍による輯佚資料集成』<sup>[99]</sup>には『年中行事秘抄』の引く『太素』の佚文として胎発育説を記載するが<sup>[100]</sup>、管見の範囲で『年中行事秘抄』に該当する記述は見られない。これらを以下に掲げる。

『広雅』

人、一月而膏、二月而脂、三月而胎、四月而胞、五月而筋、六月而骨、七月而成、八月而動、九月而躁、十月而生。

『文子』

老子曰、人受天地變化而生。一月而膏、二月而血脈、三月而胚、四月而胎、五月而筋、六月而成骨、七月而成形、八月而動、九月而躁、十月而生。形骸已成五臓乃形。

『医心方』所引『太素』<sup>[101]</sup>

玄元皇帝曰、人受天地之氣、變化而生。一月而膏、二月而脈、三月而胞、四月而胎、五月而脈筋、六月而骨、七月而成形、八月而動、九月而臑、十月而生。

『広雅』の記載は、『淮南子』の4ヶ月目「肌」が「胞」になっている以外、ほぼ合致する。「胞」は胎児を包む膜なので、やはり表面とみることができよう。また5ヶ月目に筋、6ヶ月目に骨という順番は変わらない。語彙は変化しても、外側から中側に形成が進んでいく思考は変わっていないということだろう。

『文子』と『医心方』所引『太素』には、『淮南子』にない脈・血脈の記述が2ヶ月目にあり、4ヶ月目が「胎」となっている。『医心方』所引『太素』の場合、3ヶ月目に「胞」があるので、「胞」の誤りかもしれない。血脈・脈が記されたのは、『靈樞』營衛生会第18に「夫血之与氣、異名同類」<sup>[102]</sup>とあるように、血が氣と同様に重要視されるようになったためと考えられる<sup>[103]</sup>。このような変化が生じたことからすると、外側から中側へ成長が進んでいくという『淮南子』の生物発生思考が、『文子』『太素』の成立当時には失われていたのかもしれない。しかしいずれにしろ、わずかな違いを除けば、『広雅』『文子』『医心方』所引『太素』と『淮南子』の胎發育説は一致しており、当3書の所説が『淮南子』から発展したことは間違いない。

## 4 その他

上述の各節のような各月ごとではないが、胎児の成長過程や生命の発生に関する記述が、以下の古典籍に見出された。当節ではそれらをまとめて取り上げる。

『莊子』知北遊篇<sup>[104]</sup>

人之生、氣之聚也。聚則為生、散則為死。

『管子』内業<sup>[105]</sup>

凡人之生也、天出其精、地出其形、合此以為。

『呂氏春秋』尽数篇<sup>[106]</sup>

精氣之集也、必有入也。集於羽鳥与為飛揚、集於走獸与為流行、集於珠玉与為精朗、集於樹木与為茂長、集於聖人与為夔明。精氣之来也、因輕而揚之、

因走而行之、因美而良之、因長而養之、因智而明之。

『論衡』卷二十・論死篇<sup>[107]</sup>

陰陽之氣、凝而為人、年終壽盡、死還為氣。

『莊子』では人の生死が気の聚散で説かれている。『管子』は生命の本源として精を用い、『呂氏春秋』の精気とは活動の本となる生命エネルギーを意味する。ここでの「精」とは『管子』内業<sup>[108]</sup>に「精也者、氣之精者也」とあるように、気とほぼ同様の意味を持つと考えることができよう。

そもそも気の語源には、穀食による生氣や<sup>[109]</sup>、米を蒸した時に出る湯気<sup>[110]</sup>などの説がある。気の語源を論じる余裕は筆者にはないが、食は生命維持に重要なものであり、ともに人間の生命に関係していると言える。気が使用された初期の例は『論語』<sup>[111]</sup>に見える。辞気<sup>[112]</sup>・屏気<sup>[113]</sup>・食気<sup>[114]</sup>・血気<sup>[115]</sup>で、黒田<sup>[116]</sup>によると辞気・屏気は呼吸と関連があり、食気は食欲、血気は循環機能で、いずれも人間の生理現象を意味しているとする。黒田が詳細に分析しているように、その後の「気」は時代と共に流行し、用例も『論語』と比べると飛躍的に増えていった。この発展の中で上にあげた各書に、生命の根源としての気の用例が現われたと言える。

気概念の発展は医書にも大きな影響を及ぼした。『素問』『靈樞』にはそれが如実に現われている。『靈樞』経脈第 10<sup>[117]</sup>に次の記述がある。

黄帝曰、人始生、先成精。精成而脳髓生。骨為幹、脈為營、筋為剛、肉為墻、皮膚堅而毛髮長。穀入于胃、脈道以通、血氣乃行。

当文からは生命誕生の最初の物質として「精」が重要視されていることが分かる。また『素問』金匱真言論篇第 4<sup>[118]</sup>の「夫精者身之本也」、『靈樞』決気第 30<sup>[119]</sup>の「両神相搏、合而成形。常先身生、是謂精」は、いずれも『靈樞』経脈と同じく、生命の本の意味を持つ「精」と理解される。

以上のような「精」や「気」の重要視は、『管子』水地篇や『淮南子』精神訓の胎発育説にも見える。しかし『胎産書』の「気」は 5 ヶ月目に「五月而火授之、乃始成気」とあるのみで、他の筋骨毫毛といった器官の中の一つである。これは山田が言うように<sup>[120]</sup>、「気」が「肉」その他と並ぶような身体の構成要素ではなく、もっと根源的な生命力とみなされるにいたった結果といえよう。

## 5 小結

以上に考察した戦国秦漢代の胎發育説を以下にまとめる。

(1)『胎産書』では実際の胎児の状態を観察していた可能性が示された。4ヶ月目に「始成血」とするのは、血管がすけてみえる胎児の状態を指すと考えられる。血は身体構成器官として一般的な認識があったため、胎児の成長は4ヶ月目から始まる以外ありえなかった。しかし4ヶ月目からの發育記述に五行を用いると8ヶ月目で終わってしまうため、当時存在していた六の概念を用いたと考えられる。

(2)『管子』水地篇に記された發育器官の隔と脳は、血氣を生命の根源とする水地篇の思想に基づき、血・気の代わりに加えられた器官と考えられた。また当書の發育記述は3ヶ月目、5ヶ月目、10ヶ月目しかないが、これは妊婦が自覚しやすいつわり・胎動・出産のことと考えられた。

(3)『淮南子』精神訓に記された發育器官の肌・筋・骨は外郭の形成のあとに内部の發達が進むという思考の元に、表皮と骨格を示したと考えられた。この發想は同書地形訓の生物の進化過程と共通する。

(4)『胎産書』『管子』『淮南子』には五行説との関連を推測させる記述があったが、いずれも現行の五行説と一致しなかった。これは現在の形にまとまる以前の發展段階にあった五行説、もしくは未詳の論理の存在を示唆していた。

(5)『莊子』などには、生命の發生に関する記述が存在する。生命の發生には「精」「氣」の重要視が見られた。これは医書にも影響を与え、『胎産書』では身体構成要素の一つであった「氣」が、『素問』『靈樞』では生命の根源として捉えられていた。

## 参考文献と注

[1]『馬王堆漢墓帛書 [肆]』133頁、北京・文物出版社、1985年。

[2]馬繼興『馬王堆古医書考釈』4頁、長沙・湖南科学技術出版社、1992年。

[3]上掲文献[1]、133頁～141頁。



- [4]湖南省博物館・中国科学技術研究所「長沙馬王堆二・三号漢墓発掘簡報」『文物』7期46頁、北京・文物出版社、1974年。
- [5]馬は『胎産書』は漢の呂雉の「雉」字を避けていないので、筆写年代は漢の高祖及び呂氏の執政期間としている（馬継興『中医文献学』9頁、上海・上海科学技術出版社、1990年）。
- [6]上掲文献[1]、3頁。
- [7]李勣「雲夢睡虎地秦概述」『文物』6期3頁、北京・文物出版社、1976年。
- [8]流産は臨床的に診断された全妊娠の15%に起こり、その80%～90%が妊娠12週目未満の早期流産である（『看護のための最新医学講座 15 産科疾患』103頁、中山書店、2001年）。
- [9]『管子』巻14水地篇（『四部備要』子部、台北・台湾中華書局、1973年）。
- [10]Alexander Tsiaras 著・古川奈々子訳『こうして生まれる』235頁～237頁、東京・ソニーマガジンズ、2002年。
- [11]巢元方『諸病源候論』（東洋医学善本叢書6）195頁、巻41任娠転女為男候、大阪・東洋医学研究会影印南宋版、1981年。
- [12]孫思邈『備急千金要方』19頁、巻2求子第一、北京・人民衛生出版社影印江戸医学館仿宋刊本、1982年。
- [13]上掲文献[11]、194頁、巻41任娠候。『備急千金要方』19頁、巻2妊娠惡阻第二には「妊娠四月欲知男女者、…」とある（上掲文献[12]、19頁）。
- [14]『諸病源候論』巻42任娠吐血候に「吐血而心悶胸滿、末欲止心悶、甚者死、任娠病之多墮胎也」とある。『備急千金要方』巻2には「治妊娠数墮胎方」「子死腹中第六」などがある。『医心方』巻22には「治任婦欲去胎方」があり『産経』を引用している。
- [15]「凡薬、以酸養骨、以辛養筋、以鹹養脈、以苦養氣、以甘養肉、以滑養竅」（『十三経注疏』668頁、北京・中華書局出版社、1980年）。
- [16]「□□五死、唇反人盈、則肉【先死】、□□□□、【則】骨先死、面黒、目（環）視（邪）、則氣先死、汗出如糸、伝而不流、則血先死、舌（陷）卵卷、【則筋】先死」（上掲文献[1]、21頁）。
- [17]「夫骨者柱（也）、筋者束（也）、血者濡（也）、脈者瀆（也）、肉者附（也）、氣者胸（也）」（『張家山漢墓竹簡』244頁、北京・文物出版社、2001年）。

- [18]漢以前の身体器官のバリエーションについては、林克「五体考」(『大東文化大学漢学会誌』第36号、98頁～125頁、東京・大東文化大学漢学会、1997年)に詳しい。
- [19]T.W. Sadler 著・沢野十蔵訳『ラングマン人体発生学：正常と異常』72頁、東京・医歯薬出版、1987年。
- [20]『素問』東京・日本経絡学会、1992年。
- [21]上掲文献[9]、巻14四時編。
- [22]『説文解字』に「臚(膚)、皮也」「革、獸皮治去其毛、曰革」「皮、剥取獸革者、謂之皮」「肌、肉也」とあり、『広雅』に「膚、肉也」とあるように、膚は肉の意味でも使われるため、膚革・皮膚は皮膚と肉の意味をもつと考えられる。
- [23]上掲文献[20]、巻3第9葉ウラ。
- [24]『十三經注疏』668頁、北京・中華書局出版社、1980年。
- [25]五味は最も古い五行説の記載とされる『書経』洪範篇からある概念で、五味の五行配当は後世も変わらず引き継がれた(中村璋八「五行学説に関連して」『斯文』112号94頁～107頁、東京・斯文会、2004年)。
- [26]『素問』脈要精微論篇第17に「夫脈者、血之府也」とある。
- [27]注[22]参照。
- [28]林克「五行と《六行》」『中国』12号107頁、1997年、東京・中国社会科学学会。
- [29]上掲文献[24]、668頁。
- [30]『胎産書』の各精と対応する身体器官の関係について、林は金一筋、火一氣、土一膚の音韻的類似も指摘している。鄭玄の金と筋の類似については多少強引な部分も認められ、形態的類似と共に音声的類似も根拠となった可能性は高いと考えられる(林克「五体考」『大東文化大学漢学会誌』第36号104頁、東京・大東文化大学漢学会、1997年)。
- [31]金谷治『管子の研究』239頁、東京・岩波書店、1987年。
- [32]「夏書曰、戒之用休、董之用威、勸之以九歌、勿使壞、九功之徳、皆可歌也、謂之九歌、六府三事、謂之九功、水火金木土穀、謂之六府、正徳・利用・厚生、謂之三事、義而行之、謂之徳礼、無礼不樂、所由叛也」(上掲文献[24]、1846頁)。
- [33]「於帝念哉、徳惟善政、政在養民、水火金木土穀惟修、正徳・利用・厚生惟

和、九功惟、九紱惟歌、戒之用休、董之用威、勸之以九歌、俾勿壞」（上掲文献[24]、135頁）。

[34]「襄二十七年左傳云、天生五材、民竝用之、即是水火金木土、民用此自資也、彼惟五材、此兼以穀為六府者、穀之於民尤急、穀是土之所生、故於土下言之也」（上掲文献[24]、135頁）。

[35]上掲文献[28]、107頁。

[36]馬繼興『敦煌古医籍考釈』135頁、南昌・江西科学技術出版社、1988年。

[37]馬王堆出土『五行篇』の「仁義礼知聖樂」の樂や、『左伝』『尚書』の六府「水火金木土穀」の穀などが天に関連する。詳しくは、林克「五行と《六行》」（『中国』12号、東京・中国社会科学学会、1997年）。

[38]漢以前に成立したとされ、六に整理した概念に六氣（陰陽風雨晦明あるいは風寒暑湿燥火）・六腑（大腸・小腸・胆・胃・三焦・膀胱）・六経（五経＋樂記あるいは三陰三陽）・六情（喜怒哀樂好悪）・六欲（生死耳目口鼻）・六徳（知仁聖義忠和あるいは礼仁信義勇知）・六合（東西南北天地）・六芸（礼樂射御書数）・六親（父母兄弟妻子ないし父母兄弟夫婦）などがある。

[39]村上陽子「出土資料からみた漢代の食生活」『中国出土資料研究』第9号76頁、東京・中国出土資料学会、2005年。

[40]上掲文献[31]、285頁。

[41]郭沫若・聞一多・許維遹撰『管子集校』下冊679頁、北京科学出版社、1956年。

[42]羅根沢『管子探源』91頁～92頁、香港太平書局、1966年。

[43]上掲文献[31]、291頁。

[44]上掲文献[9]、卷14水地篇。

[45]而に作るべきとする安井衡らの説に従い「如」を「而」に改める（上掲文献[41]による）。

[46]五内に作るべきとする丁士涵の説に従い「肉」を「五内」に改めた（上掲文献[41]による）。

[47]膈に改めるべきとする説もある（上掲文献[41]による）。

[48]丁士涵らに従い「肉」を「内」に改めた（上掲文献[41]による）。

[49]竅を口とするテキストもあることから「竅」を「口」に改めるべきという安

井衡らの説に従った（上掲文献[41]による）。

[50]文子では「肺発為竅」の後に「心発為舌」の句があるテキストもあるため当句を補うべきと言う安井衡、戴望の説に従い補った（上掲文献[41]による）。

[51]上掲文献[19]、65 頁。

[52]上掲文献[1]、138 頁。

[53] 原文は「咀」を「𦵏」に作る。「咀」と「𦵏」は音通し、『管子』の 3 ヶ月目に「三月而咀」とある。『胎産書』の「𦵏時」も 3 ヶ月目を示す可能性が高いため、「𦵏」は「咀」の仮借と考えられる。また本文で述べるが、馬王堆から出土した『五十二病方』では「咀」の意味に「沮」を用いている。一方『漢書』では「沮」と「𦵏」の仮借の例が見られるため、「咀」「𦵏」「沮」は共用されることがあったと考えられる。

[54]『管子』の「咀」を張佩綸は含み味わうことし、郭沫若は「蛆」の誤りであるというが、両意見では『胎産書』の「咀」の意味が通らない。

[55]丹波康頼『医心方』（国宝半井家本）巻 22 第 17 葉オモテ、大阪・オリエン  
ト出版、1991 年。

[56]上掲文献[11]、195 頁、巻 41 妊娠悪阻候。

[57]上掲文献[12]、20 頁、巻 2 妊娠悪阻第二。

[58]つわりは「悪心、嘔吐、食欲不振などを主徴とする妊娠によって起こる消化器症状を主とした症候」を指す（日本産婦人科学会編『産婦人科用語解説集第 2 版』、東京金原出版、1997 年）。

[59]つわりは 6 週目ごろまでに出現し 12 週目から 16 週目までには消失する（『看護のための最新医学講座 15 産科疾患』74 頁、中山書店、2001 年）。

[60]『説文解字』に「阻、検也。従阜、且声」「咀、含味也。従口、且声」とある（『説文解字段注』774 頁・58 頁、四川・新華書店、1981 年）。

[61]『礼記』儒行の「劫之以衆、沮之以兵」の孔疏に「俗本沮或為阻字」とある（上掲文献[24]、1669 頁）。また『説文通訓定声』に「沮仮借為阻」とある。現代では「阻止」「沮止」などの例がある。

[62]上掲文献[1]、23 頁から 82 頁。

[63]妊娠 20 週前後にはほとんどすべての妊婦が胎動を自覚するようになり、妊娠 28 週から 32 週にかけて最も頻繁に胎動を自覚し、以降徐々に減少する（『新

女性医学大系 22 正常妊娠』369 頁、中山書店、2001 年)。

[64]上掲文献[12]、22・23 頁、卷 2 徐之才逐月養胎方。

[65]王燾『外台秘要方』(東洋医学善本叢書 5) 632 頁、卷 33 妊娠随月数服薬及将息法、大阪・東洋医学研究会、1981 年。

[66]『医心方』所引『集驗方』には「二三月至八九月、胎動不安、腰痛、已有所見方…」とある(『医心方』卷 22 第 20 葉オモテ)。他に『医心方』所引『産経』に「治任身七八月、腰腹痛、胎不安、汗出逆冷、飲食不下、氣上煩満、四肢痺強、当帰湯方…」としている(『医心方』卷 22、21 葉オモテ)。

[67]胎生 4 ヶ月目および 5 ヶ月中に胎児はすみやかに伸長する(上掲文献[19]70 頁)。

[68]上掲文献[20]、卷 2 第 5 葉オモテ～6 葉ウラ。

[69]真柳誠「古代中国医学における五味論の考察－「内経」系医書の所論」『矢数道明先生退任記念 東洋医学論集』97 頁～117 頁、東京・北里研究所附属東洋医学総合研究所、1986 年。

[70]『淮南鴻烈集解』卷 4 地形訓(台北・台湾商務印書店、1974 年)に「蒼色主肝…赤色主心…白色主肺…黒色主腎…黄色主胃」とある。

[71]林克「五蔵の五行配当について－五行説研究その一」中国思想史研究 6 号 47 頁、東京・京都大学文学部中国哲学史研究室、1984 年。

[72]上注[16]参照。

[73]上注[17]参照。

[74]上注[15]参照。

[75]『史記』卷 105、2798・2799 頁(北京・中華書局、1959 年)に「氣鬲病。病使人煩食不下。時嘔沫」とある。

[76]『靈枢』卷 19 第 7 葉ウラ、東京・日本経絡学、1992 年。

[77]『靈枢講義』卷 19 第 22 葉オモテ、大阪・オリエント出版社、1994 年。

[78]上掲文献[20]、卷 14 第 3 葉オモテ。

[79]森立之『素問攷注』735 頁、日本内経医学会、1998 年。

[80]上掲文献[24]、1906 頁。

[81]上掲文献[75]、卷 99、2716 頁。

[82]上掲文献[24]、1825 頁。

- [83]上掲文献[75]、巻 105、2788 頁。
- [84]上掲文献[76]、巻 6 第 5 葉ウラ。
- [85]上掲文献[20]、巻 3 第 11 葉オモテ。
- [86]石田秀実『氣流れる身体』13～50 頁（東京・平河出版社、1987 年）に詳しい。
- [87]林克「五体考」『大東文化大学漢学会誌』第 36 号 114 頁、東京・大東文化大学漢学会、1997 年。
- [88]上掲文献[70]、巻 7 精神訓。
- [89]上掲文献[70]、巻 4 地形訓。
- [90]平岡禎吉『淮南子に現われた気思想』230 頁、東京・漢魏文化学会、1961 年。
- [91]上掲文献[70]、巻 4 地形訓。
- [92]諸橋轍次『大漢和辞典』巻 9、269 頁、東京大修館書院、1958 年。
- [93]上掲文献[90]、233 頁。
- [94]『大戴礼記補注』巻 5（『叢書集成』第 433 集、上海・商務印書館、1939 年）。
- [95]『釈名』巻 2（『四部叢刊初編』経部上海・商務印書館、出版年不明）。
- [96]王念孫撰『広雅疏証』巻 6 釈親、上海古籍出版社、1983 年。
- [97]『通玄真経』巻 3 九守（『四部叢刊 3 編』子部、上海・上海書店、1985 年）。
- [98]上掲文献[55]、巻 24 第 6 葉オモテ・ウラ。
- [99]新美寛編、鈴木隆一補『本邦残存典籍による輯佚資料集成』381 頁、京都・京都大学人文科学研究所、1968 年。
- [100]『本邦残存典籍による輯佚資料集成』に記された『太素』の佚文：  
人受天地之氣、變化而生。一月而膏、二月而肱、三月而胞、四月而胎、五月而筋、六月而骨、七月而成、八月而躁、十月而生。形骸已成五臟乃形著。
- [101]『医心方』巻 22 でも『太素』の当文を抄録している。
- [102]上掲文献[76]、巻 8 第 5 葉ウラ。
- [103]「氣」の重要視については次節で詳述する。
- [104]『南華真経』巻 7（『四部叢刊初編』子部、上海・商務印書館、出版年不明）。
- [105]上掲文献[9]、巻 16 内業篇。
- [106]陳奇猶校釈『呂氏春秋校釈』136 頁、上海・学林出版社、1984 年。

- [107]『論衡校釈』巻 20、876 頁、台北・台湾商務印書館、1983 年。
- [108]上掲文献[9]、巻 16 内業篇。
- [109]黒田源次『気の研究』7 頁～19 頁、東京・東京美術、1977 年。
- [110]藤堂明保『漢字語源辞典』705 頁、東京・学燈社、1965 年。
- [111]上掲文献[24]、2457 頁～2536 頁。
- [112]『論語』泰伯「君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣。正顔色、斯近信矣。出辞気、斯遠鄙倍矣。籩豆之事、則有司存」。
- [113]『論語』郷党「摂斉升堂、鞠躬如也。屏気似不息者、出降一等、逞顔色、怡怡如也」。
- [114]『論語』郷党「割不正、不食。不得其醬、不食。肉雖多、不使勝食気。惟酒無量、不及乱」。
- [115]『論語』李氏「君子有三戒。少之時血気未定。戒之在色。及其壯也。血気方剛。戒之在闘。及其老也、血気既衰。戒之在得」。
- [116]上掲文献[109]、22 頁～55 頁。
- [117]上掲文献[76]、巻 5 第 1 葉オモテ。
- [118]上掲文献[20]、巻 1 第 21 葉オモテ。
- [119]上掲文献[76]、巻 11 第 3 葉オモテ。
- [120]山田慶兒『中国医学の起源』268 頁、東京・岩波書店、1999 年。

## 第 2 章 『胎産書』からの発展

『胎産書』『管子』『淮南子』に見られる戦国秦漢代の胎発育説は共通点が少なく、それぞれが異なる思想・身体観を持っていたことを前章で明らかにした。しかし隋唐代成立の医書に見られる胎発育説は、おおよそ『胎産書』系統から発展しているようである。本章で胎発育説の記述がある『諸病源候論』『千金方』と『医心方』所引『産経』について、『胎産書』からどのように変化したかを考察する。なお『外台秘要方』にも胎発育説はあるが、『千金方』の引用につき扱わ

ない。

## 1 研究資料

『諸病源候論』『千金方』『医心方』の成立年代はおおむね明らかになっており、それ以上の考究を本稿は目的としない。しかし、各書には後世の改変や所引文献の年代等の問題があるため、所載の胎発育説が各書の成立年代と同じであるとは速断できない。そこで各文献の胎発育説について検討し、各々の年代と内容の問題をまず考察したい。

### (1) 諸病源候論

『諸病源候論』は隋の巢元方らが 610 年に編纂した病因・病理を中心とした医書である<sup>[1]</sup>。胎発育説は本書巻 41 の妊娠候にあり<sup>[2]</sup>、冒頭は「経云」から始まる。それ以下の文章は脈診による妊娠の有無や、胎児の性別の判断についての記述で、『胎産書』には見えない。しかし『脈経』（280 頃）巻 9 に一致する部分がある<sup>[3]</sup>。その一致状態からみて、当該部分は『脈経』の引用と判断される。他方、『脈経』の一致文でも冒頭に「経云」が冠され、その「経」とはすでに亡佚した漢以前の医書の可能性があるが<sup>[4]</sup>、具体的な特定は難しい。

下に『胎産書』と『諸病源候論』の妊娠 1 ヶ月と 2 ヶ月の文のみを比較したが、下線部のように『胎産書』には見られない記述が『諸病源候論』にある。それは経脈・臓腑が主る器官と胎児発育の記述で、『胎産書』とは別系統の理論から付加されたと考えられる。経脈の記述は 1 ヶ月目から 9 ヶ月目まで各月 1 脈ずつあり、新しい胎児の発育の記述は 2 ヶ月目と 4 ヶ月目から 9 ヶ月目にある。しかし「始膏」「財貞」など特徴的用語からも分かるように、『胎産書』系統の内容から発展していることは疑いの余地もない。

なお現伝の『諸病源候論』は 1026 年の校刊を経ており<sup>[5]</sup>、その内容がどれだけ原本に近いかは分からない。

#### 『胎産書』

一月名曰（流）形。食飲必精、酸羹必【熟】、毋食辛（腥）、是謂財貞。



二月始膏、母食辛臊、居处必静、男子勿劳、百節皆病、是（謂）始（藏）。

#### 『諸病源候論』

懷妊一月、名曰始形。飲食精熟、酸美受御、宜食大麦、无食腥辛之物、是謂才貞。足厥陰養之、足厥陰者肝之脈也、肝主血。一月之時、血流澁如不出、故足厥陰養之。

妊娠二月、名曰始膏。无腥辛之物、居必静处、男子勿劳、百節皆痛、是謂始藏也。足少陽養之、足少陽者膽之脈也、主於精。二月之時児精成於胞裏、故足少陽養之。

## (2) 千金方

『千金方』は唐の孫思邈によって 650 年から 658 年の間に編纂された医方書で<sup>[6]</sup>、転写を繰り返しながら後世に伝わってきた。現伝の版本には大別して、宋政府校正医書局の林億らが 1066 年に改訂・刊行した『備急千金要方』（以下『備急』と略）系<sup>[7]</sup>と、林億らの改訂を経ていない『新雕孫真人千金要方』（以下『新雕』と略）系<sup>[8]</sup>がある。

これら二版本の胎發育説を比較すると明らかに違う。一字一句の違いから始まるが、最大の違いは、『新雕』には各臓腑が主る器官等と、それに対応した各月の胎児の成長が全く記されていない点である。さらに注目すべきは、『備急』の胎發育説の冒頭に「徐之才逐月養胎方」と記されている点である。

徐之才の「逐月養胎方」は中国歴代正史に著録されず、成立年代はもとより、存在したことさえ明らかでない。この徐之才は道術を修得した仲融の子孫であり、『北齊書』卷 33 には梁に仕え 21 歳の時に赴任地で北魏軍の捕虜となった、とある<sup>[9]</sup>。ならば恐らく 6 世紀前半の人物であろう。また皇太后にも薬を献上するほど医術の腕をかわれ重宝されていたともあり、彼が「逐月養胎方」を説いていたとしても不思議はない。つまり「逐月養胎方」が存在したとすれば、その成立も当時代であることは間違いない。すると『備急』の胎發育説は、『諸病源候論』よりも古い時代に記されたと仮定される。しかし当仮定には以下の疑問 2 点が生じよう。

第 1 になぜ『新雕』には「徐之才逐月養胎方」の記述がないのか。第 2 になぜ『新雕』には臓腑が主る器官と、それに対応した胎児の成長に関する記述がな

いのか。そこで各疑問について簡単に検討を加えたい。

①なぜ『新雕』には「徐之才逐月養胎方」の文字がないのか。これには以下の可能性が考えられる。

第1は転写による脱字の可能性である。前述の通り、『千金方』は転写を繰り返しながら後世に伝えられてきた。当伝承過程で誤字や脱字が生じるのは当然だろう。『新雕』の底本には、本来あった「徐之才逐月養胎方」の文字が失われていたのかもしれない。

第2は林億らによる改訂・加筆の可能性である。1066年に林億らによって行われた改訂は『新雕』と比較するとよく分かるが、相当に大規模かつ激しかった。その過程で胎發育説の冒頭に、何かの根拠があって「徐之才逐月養胎方」の文字が加えられたのかもしれない。というのも『外台秘要方』巻33が『千金方』等から引用する胎發育説部分には「妊娠随月数服薬及将息法」の見出しがあり、冒頭に「千金妊娠一月名始胚…」と『千金方』を引用するものの<sup>[10]</sup>、当該部分全体を含め「徐之才逐月云々」の字句は見当たらない。以上からすると、徐之才の「逐月養胎方」は本来存在しなかった可能性がいささか高いように思われる。

②なぜ『新雕』には臓腑が主るものと、それに対応した胎児の成長に関する記述がないのか。

まず想起されるのは林億らが改訂の際に書き加えた可能性だろう。中国では書物の伝承過程で一部が欠落することがあっても、個々の記述が削除されることは普通なく、どちらかというに加筆されることが多い。それは後述する胎發育説の後世における変遷も同じで、時代を経るにしたがって加筆にともなう変化が増している。しかも『諸病源候論』には『備急』とほとんど相違ない当疑問の記述がある。すると『諸病源候論』にも1026年の改訂の際か、それ以前の転写過程で加筆された可能性が示唆されよう。

一方、当疑問の記述は、北宋政府が編纂して992年に初刊した『太平聖恵方』全100巻の胎發育説部分<sup>[11]</sup>にない。このような龐大な医学全書に記述がないことを考えるなら、後の1026年と1065年に改訂・刊行された『諸病源候論』と『千金方』に共通する当該疑問の記述は、改訂の際に加筆された可能性を示唆しよう。

以上を要するに、徐之才の「逐月養胎方」はかつての存在を確証できず、仮にあ

ったとしても『備急』の胎発育説そのものだった可能性は低いと推定された。ならば各々の胎発育説は『備急』や『諸病源候論』のそれより、宋代の改訂がない『新雕』のそれが古いと推知される。以上の考察に基づき以下の検討を進めるが、『千金方』については万全を期するため『備急』『新雕』の双方を資料に使用したい。

下に『備急』『新雕』の胎発育説より、妊娠 1 月・2 月文の一部を挙げてみた。両者には些細な相違があるものの『千金方』の別伝本同士ゆえ、やはり同系にあることが前掲『胎産書』文との比較から了解できよう。そして両者の記載は用語の特徴からしても、『胎産書』系統の内容から発展していることは明らかである。

なお、下線部は『胎産書』に見えない記述である。『備急』『新雕』ともに経脈と新しいタイプの養胎の記述が存在する。またすでに述べたように、臓腑が主る器官と胎児の成長の記述は『新雕』に見えない。

#### 『備急』

妊娠一月、名始胚。飲食精熟、酸美受御、宜食大麦、無食腥辛、是謂才正。

妊娠一月、足厥陰脈養、不可針灸其經。足厥陰内属于肝、肝主盤及血。一月之時、血行否澁、不為力事、寢必安靜。無令恐懼。

妊娠二月、名始膏。無食辛臊、居必静処、男子勿勞。百節皆痛、是為胎始結。

妊娠二月、足少陽脈養、不可針灸其經。足少陽内属于胆、主精。二月之時、児精成于胞裏。当慎護驚動也。

#### 『新雕』

(妊娠一月の記載を欠く)

妊娠二月、名始膏。無食辛、居必静処、男子勿勞、百節皆痛、是為始蔵。…

妊娠二月、足少陽脈養、不可針灸其經。足少陽内属于胆。当慎護驚動。

### (3) 医心方

平安時代 984 年に丹波康頼が撰進した『医心方』は、200 以上の文献による引用文から構成され、所引文献のほとんどは唐以前のものである<sup>[12]</sup>。それら文献には佚書が多く、本書の胎発育説<sup>[13]</sup>も佚書『産経』から引用されている。

この書名は中・日に記録があり、巻数の相違から 2 種類あったことがわかる。一つは『隋書』経籍志子部五行にある「産経一卷」<sup>[14]</sup>、もう一つは『日本国見

在書目録』にある「産経十二、徳貞常撰、産経図三」<sup>[15]</sup>である。岡西は『宋以前医籍考』において、『医心方』所引の『産経』を『隋書』経籍志にある「産経一卷」だとするが、理由は述べていない<sup>[16]</sup>。これに対し馬は『日本国見在書目録』にある『産経』だとし<sup>[17]</sup>、根拠に『医心方』25巻61葉ウラにある「此是徳家秘方不伝。出産経」の記載をあげる。この「徳家」は『日本国見在書目録』著録の「徳貞常撰」と合致するので、馬説は恐らく間違いない。

さらに馬は『医心方』所引『産経』がさらに『葛氏方』を引くことから、当『産経』の成立を晋代以後南北朝時期（316～581）とするが、理由を記さない。当『産経』の成立上限が、葛洪（261～341）の原著に由来する『葛氏方』以降であるのは当然だが、下限を南北朝期と推定するのはいささか根拠薄弱に思える。

『日本国見在書目録』（895頃）が当書を最初に著録することから、当該『産経』の成立下限は唐代まで下げていいかもしれない。

ともあれ『医心方』所引の『千金方』が北宋改訂以前の旧態を留めている<sup>[18]</sup>ことを勘案するなら、当『産経』の胎发育説も北宋に改訂された『備急』や『諸病源候論』のそれより、形式的に古いことは確かだろう。なお当『産経』引用文の胎发育説より妊娠1月・2月の一部を以下に挙げるが、『胎産書』系統の内容から発展した文章であるの是一目瞭然だろう。

ただし、これまでと同様、下線部の『胎産書』には関連しない記述がある。経脈の記述は『諸病源候論』『千金方』が9ヶ月目までなのに対し、10ヶ月目まで記されている。また『備急』と同様に新しいタイプの養胎法も存在した。一方で『諸病源候論』『備急』に見られた胎児の发育記述はない。臓腑が主る器官の記述も1ヶ月目のみである。

懷身一月、名曰始形。飲食必熟酸美、無御大夫、無食辛腥、是謂始載貞也。  
一月足厥陰脈養、不可針灸其經也。厥陰者是肝、肝主筋。亦不宜為力事、寢必安靜、無令恐懼。

懷身二月、名曰始膏。無食辛臊、居必静处、男子勿勞、百節骨間皆病、是謂始藏也。  
二月足少陽脈養、不可針灸其經也。少陽者内屬於膽。當護慎、勿驚之。

#### (4)まとめ

以上の三書について考察した結果は次のようにまとめられる。

①紀元前約 165 年より以前の中国で著された『胎産書』に見える胎発育説は、唐代までの『諸病源候論』『千金方』および『医心方』所引『産経』に継承されていた。

②しかし『諸病源候論』『千金方』『医心方』所引『産経』の各書には、経脈や新しいタイプの養胎・発育といった『胎産書』とは別系統の理論からの援用と考えられる記述もあった。

③『医心方』所引『産経』および『新雕』の胎発育説は、『備急』『諸病源候論』のそれよりも古いと考えられた。

以後、この結果をもとに『胎産書』から発展した部分について考察を加える。

## 2 『胎産書』系の養胎説

後世の 3 書で内容が『胎産書』からさらに増加していった養胎の記述は、各月ごとに多様であるが、多くは思想背景などがあまり窺えない一般的養胎と判断される。例えば「食飲必精、酸羹必熟」「母食辛臊、居处必静」など、妊婦に栄養をとらせ、安静にさせる等である。また「無静处、出遊於野」など、安定期に運動をするなど現在も一般的な養胎がある。しかし一般的養胎とは異なる増加を示す特徴的な記述もあった。それが 3 ヶ月目である。

### (1)胎児への願望

検討した全文献に 3 ヶ月目の胎児はまだ定まった形がなく、外の影響を受け、変化する等の記述がある<sup>[19]</sup>。そのためか当月には生まれる子供への願望の記述が多い。各書の 3 ヶ月目には以下の記述がある。

『胎産書』<sup>[20]</sup>

三月始脂、果隋宵效、当是之時、未有定（儀）、見物而化、是故君公大人、毋使侏儒、不觀（沐）（猴）、不食（葱）姜、不食兔羹、□欲産男、置弧矢、□雄雉、乗牡馬、觀牡虎。欲生女、佩（簪）（珥）、（紳）（珠）子、是謂内象成子。

『諸病源候論』<sup>[21]</sup>

妊娠三月、始胎、当此之時血不流、形像始化、未有定儀見物而変。欲令見貴盛公王、好人端正、莊嚴。不欲令見、傴僂朱儒醜惡形人、及猿猴之類、无食薑葱、无懷刀繩。欲得男者、横弓矢射雄鷄、乘肥馬、於田野見虎豹及走犬。其欲得女者、則著簪珂環珮弄珠璣。欲令子美好端正者、数視白璧美玉、看孔雀、食鯉魚。欲令兒多智有力、則噉牛心食大麦。欲子賢良盛德、則端心正坐、清虚和一、坐无邪席、立无偏倚、行无邪径、目无邪視、耳无邪聽、口无邪言、心无邪念、无妄喜怒、无得思慮、食无到嚮、无邪臥、无横足。思欲食果瓜、噉味酸菹、好芬芳、惡見穢臭、是謂外象而変者也。

『備急』<sup>[22]</sup>

妊娠三月、名始胎。当此之時、未有定儀、見物而化。欲生男者、操弓矢。欲生女者、弄珠璣、欲子美好、数視璧玉。欲子賢良、端坐清虚。是謂外象而内感者也<sup>[23]</sup>。

『産経』<sup>[24]</sup>

任身三月、未有定儀、見物而為化、是故応見王公、后妃、公主、好人。不欲見傴僂朱儒、醜惡、瘠人、猿猴。其欲生男者、操弓矢、射雄鷄、乘牡馬、走田野、觀虎豹及走馬。其欲生女者、着簪珥施環、欲子美好者、数視白玉美珠、觀孔雀、食鯉魚。欲令子多智有力者、当食牛心、御大麦。欲令子賢良者、坐無邪席、立無偏行。是謂以外像而内化者也。

各文献から、胎児への願望を抜き出すと次のようになる。

- ①男が欲しい、②女が欲しい、③器量のいい子が欲しい、④智慧と力のある子が欲しい、⑤賢く徳のある子がほしい。

しかし、これらが全書に共通しているわけではない。以下、表に各書の記述をまとめる。

[表 6] 胎児への願望

	胎産書	諸病	新雕	備急	産経
--	-----	----	----	----	----

①男の子が欲しい	○	○		○	○
②女の子が欲しい	○	○		○	○
③器量のいい子が欲しい		○		○	○
④智恵と力のある子が欲しい		○			○
⑤賢く徳のある子が欲しい		○		○	○

当表より、『胎産書』は男児か女児かという性別の希望のみだったのが、時代を経るごとに容姿や人格にまで希望が及んでいったことを理解できる。

では、それぞれの養胎について考えてみよう。①②③の養胎は各書とも量や記述内容等に違いが多少あるが、全て形象イメージによる養胎法である。男が欲しければ、男らしいもの（弓矢等）を身近に置いたり、猛々しいもの（虎等）を見る。女が欲しければ、女らしいもの（耳飾等）を身に付ける。器量のいい子が欲しければ、美しいものを見たり食べたりするのである。

それに対し、④⑤は少し違う。④には智恵と力のある子が欲しければ、牛心をくらい、大麦を食すとある。牛は力があることから形象イメージされたとも考えられるが、心臓や麦は智恵とも力とも直接結びつかない。一方、『素問』巻3六節蔵象論篇第9<sup>[25]</sup>には「心者生之本神之主也」とあり、心臓が精神機能も果たす器官として当時認識されていたことがわかる。また麦の五行配当は心臓と同じ火である。つまり心と、心と同じ火に属す麦を共に食べることで、智恵のある子を生もうとしたのではないだろうか。ならば④は、形象イメージと五行理論が混ざり合っていると考えられる。

⑤は徳のある子がほしければ、心を正しくし、正しくない席には座らない、『諸病源候論』では悪い物を見たり聞いたりしない等とある。これは恐らく、正しい行いが徳につながるということであろう。しかし①②③に比べて、明瞭に形象からと言い切れるものではない。これは④にも言えることである。この違いはなんだろうか。

まず①②③だが、これらの望みは目に見えるものであると言えよう。そのため形象も具体的事物に例えやすい。それに対し④⑤の望みは性格や素質等、目に見えない内面的である。そのため明瞭な形に置き換えることも難しく、上記したような養胎法が説かれたと考えられる。いずれにしろ、外面的な望みのみであっ

たものが、目に見えない内面的な事象にも及んでいっていることがわかる。そのため形象による養胎にも微妙な変化が生まれたのだろう。

## (2)古代の胎教

(1)で述べた「徳のある子が欲しい」場合の養胎法の原型は、古代の胎教の思想に見える。そこで古代の胎教について詳しく検討し、『胎産書』系の養胎との関わりについて考えたい。

前漢の賈誼の作とされる『賈誼新書』には胎教篇<sup>[26]</sup>がある。まず「易曰、正其本而万物理、失之毫釐、差以千里」とあり<sup>[27]</sup>、全てにおいて始めが重要であるから、子孫のために選ぶべき妻を述べる。つまり、生まれてくる子供の性は母親の性によって変わるということであろう。

続いて「青史氏之記」なる書を引用し、「胎教の道」を説く。「青史氏之記」とは、『漢書』芸文志<sup>[28]</sup>に「青史子五十七篇」と著録され、注に「古史官記事也」とある書のことだと思われる。続く文は妊婦の禁止事項をいう。内容は、王后が礼楽以外を求める時、家臣は音楽を学んでないと言うなど、妊婦への言葉ではなく、妊婦に仕える者達への言葉ととれる。他にも正味でなければ食べさせない、などの記述があるが<sup>[29]</sup>、いずれも妊婦ではなく、妊婦の周りにいる者達への心構えであったようだ。

当部分以外には、周の妃后が成王を身ごもった時の行動が記されている。

周后妃、妊成王於身、立而不跛、坐而不差、独处而不倨、雖怒而不罵。胎教之謂也。

以上の胎教を行ったから、成王のような人が生まれたのだという。座り方や立ち方に注意を払うなど、『諸病源候論』や『産経』の養胎部分に近い。しかし観念的であり、具体的な妊婦への修身法は説いておらず、『賈誼新書』の胎教は聖人の母のすばらしさを説く意図があったと考えられる。では、なぜ『胎産書』系の養胎に胎教が用いられたのだろうか。同じく胎教の記述がある『列女伝』<sup>[30]</sup>を見てみよう。

『列女伝』は漢の劉向の作である。巻1周室三母の文王の母・大任の記述には、「及其有娠、目不視惡色、耳不聽惡声、口不出敖言、能以胎教」と、妊娠中に悪い物を見ず、悪い声を聞かずといった胎教を行ったとある。また「大任之性、端



一誠莊、惟徳之行」と、文王の母も生まれつき聖人であったことを記す。『賈誼新書』と同様に聖人の母も聖人とする意図が当書の胎教にも見えるが、注目すべきは以下の文である。

故妊人之時、必慎所感。感于善則善、感于惡則惡。人生而肖父母者、皆其母感于物。故形意肖之。文王母、可謂知肖化矣。

当文は、妊娠中に善を感じれば胎児も善となり、悪に感じれば胎児も悪となる、と妊婦の行動が直接胎児に影響を与えることを説く。当文での「肖化」は、「感応」のことだろう。『賈誼新書』には見られなかった「感応」という理論を持つことで、観念的な内容が具体性を帯びている。

『胎産書』系の 3 ヶ月目の養胎を振り返ってみよう。すでに述べたように 3 ヶ月目には、胎児はまだ定まった形がなく、外の影響を受け、変化する等の記述があった。また『胎産書』を例にとれば、男女の生み分けとして、男らしいものを見たり置いたりすると男が生まれ、女らしいものを見たり身につけたりすると女が生まれるとする。他にも小柄なものに身の回りの世話をさせない、猿の類を見せない、という禁止事項があった。いずれも母親の見た物が胎児に影響を与える「見物而化」を前提としている。感じたもの、見たものという違いはあるが、母親の行動が直接胎児に影響をあたえる点で『列女伝』と同じである。そのため 3 ヶ月目の養胎と、胎教の思想が結びついたと考えられる。

### 3 小結

以上を要するに、『諸病源候論』『千金方』『産経』は『胎産書』の記述を基に発展している。ただし一部には『胎産書』とは関連が見られない内容があった。

『胎産書』系の内容から発展した後世の養胎説は、思想背景などの少ない一般的養生が主と言える。ただし妊娠 3 ヶ月目では、胎児の内面的事象など願望の多様化に対応し、形象イメージや五行説、古代の胎教を援用した養胎法も説かれていた。

## 参考文献と注

- [1]小曾戸洋「『諸病源候論』の書誌について」(東洋医学善本叢書 8) 269～298 頁、大阪・東洋医学研究会、1918 年。
- [2]巢元方『諸病源候論』(東洋医学善本叢書 6) 194・195 頁、大阪・東洋医学研究会影印南宋版、1981 年。
- [3]王叔和『脈経』(東洋医学善本叢書 7) 89 頁、大阪・東洋医学研究会影印何大任仿宋版、1981 年。
- [4]小曾戸は、当該部分が既に亡佚した漢以前の医書からの引用ではないか、と推測する(「『脈経』総説」(東洋医学善本叢書 8) 393 頁、大阪・東洋医学研究会、1981 年)。
- [5]上掲文献[1]、269～298 頁年。
- [6]小曾戸洋『中国医学古典と日本』440 頁、東京・塙書房、1996 年。
- [7]孫思邈『備急千金要方』21～24 頁、北京・人民衛生出版社影印江戸医学館仿宋刊本、1982 年。
- [8]孫思邈『新雕孫真人千金要方』巻 2 第 10 葉オモテ～14 葉オモテ、静嘉堂文庫(東京)所蔵南宋版のマイクロフィルム焼き付けによる。
- [9]李百薬『北斉書』444～448 頁、北京・中華書局、1972 年。
- [10]王燾『外台秘要方』(東洋医学善本叢書 5) 巻 33 第 10 葉ウラ、大阪・オリエント出版影印南宋版、1981 年。
- [11]『太平聖恵方』(東洋医学善本叢書 20) 巻 76 第 1 葉ウラ～3 葉オモテ、大阪・オリエント出版影印南宋版、1991 年。
- [12]上掲文献[6]、533 頁。
- [13]丹波康頼『医心方』(国宝半井家本) 巻 22 第 2 葉オモテ～13 葉オモテ、大阪・オリエント出版、1991 年。
- [14]魏徵ら『隋書』1037 頁、北京・中華書局、1973 年。
- [15]藤原佐世『日本国見在書目録』82 頁、東京・名著刊行会、1996 年。
- [16]岡西為人『宋以前医籍考』1077 頁、台北・古亭書局、1969 年。
- [17]馬繼興『中医文献学』219 頁、上海・上海科学技術出版社、1990 年。
- [18]上掲文献[6]、532 頁。

[19]『新雕』にはないが、他書全てに何らかの記述があることを見ると、当該部分が脱落してしまった可能性がある。

[20]『馬王堆漢墓帛書〔肆〕』136頁、北京・文物出版社、1985年。

[21]上掲文献[2]、194頁。

[22]上掲文献[7]、21・22頁。

[23]徐之才逐月養胎方部分ではないが、3ヶ月目の養胎の記述として『備急千金要方』養胎第三に「論曰、旧説凡受胎三月、逐物變化稟質未定。故妊娠三月、欲得觀犀名勝猛獸、珠玉宝物、欲得見賢人君子、盛徳大師、觀礼楽、鐘鼓、俎豆、軍旅陳設、焚燒名香、口誦詩書、古今箴誡。居処簡静、割不正不食、席不正不坐、彈琴瑟、調心神、和情性、節嗜欲、庶事清浄、生子皆良、長寿忠孝、仁義聰恵、無疾。斯蓋文王胎教者也」とある。

[24]上掲文献[13]、巻22第13葉オモテ。

[25]『素問』巻3第7葉ウラ、東京・日本経絡学会、1992年。

[26]『新書』巻10（『四部叢刊初編』子部、上海・商務印書館、出版年不明）。

[27]現行本の『易経』に該当する文はない。

[28]『漢書』巻30、1744頁、中華書局、1962年。

[29]上掲文献[26]の巻10に、「古者胎教、古者胎教之道、王后有身七月、而就蓐室。太師持銅而御戸左、太宰持斗而御戸右、太卜持蓍龜而御堂下。諸官皆以其職御於門内、此三月者、王后所求声音非礼楽、則太師撫楽而称不習。所求滋味者非正味、則太宰荷斗而不敢煎調」とある。

[30]『古列女伝』巻1（『四部叢刊初編』史部、上海・商務印書館、出版年不明）。

### 第3章 六朝隋唐代の胎発育説

前章のように、『諸病源候論』『千金方』『産経』には『胎産書』にない内容も存在した。これら新出の内容には、妊娠各月に対応した経脈説、胎児の発育説、養胎法がある。ついては各々に後世各書の記述を比較し、それらに影響を与えた

思想背景、さらに各書における所説の伝承関係についても考察する。

## 1 経脈

経脈とは宇宙生命の根源たる「気」が人体に流れるルートで、『素問』以降では三陰三陽および六臓六腑に配当された十二経脈を主とし、針灸を行う部位の経穴（ツボ）も後世は経脈上にあるとされる。『諸病源候論』『千金方』『医心方』所引『産経』の胎發育説では妊娠の各月に養われる一脈ずつがあげられ、その経脈には灸も針もしてはならず、この禁忌を犯すと胎児を傷つけるおそれがあるという。さらにこれら経脈には各々の対応臓腑が記され、以上の記述は各書ほぼ共通している。

他方、『脈経』にも同じ経脈の記述を見ることができる。『脈経』は脈診を中心とした医学書で、今からおよそ 1700 年前に王叔和によって著された<sup>[1]</sup>。『諸病源候論』はもちろん、『千金法』『産経』が成立する以前の書である。

妊娠中の養うべき経脈は、『脈経』平妊娠胎動血分水分吐下腹痛証第 2<sup>[2]</sup>に以下のように記述されている。

婦人懐胎一月之時足厥陰脈養。二月、足小陽脈養。三月、手心手脈養。四月、手小陽脈養。五月、足太陰脈養。六月、足陽明脈養。七月、手太陰脈養。八月、手陽明脈養。九月、足少陰脈養。十月、足太陽脈養。諸陰陽、各養三十日、活児。手太陽少陰不養者、下主月水、上為乳活児養母。懷妊者、不可灸刺、其経必墮胎。

以上では、各月の経脈が『諸病源候論』『備急千金方』『産経』と合致するが、臓腑や『胎産書』に始まる胎児の成長・養胎等の記述が全く見えない。逆に『脈経』には以上の条文に続き、妊娠や胎児の男女、各月の胎児の状態を脈診で判断する方法がある。これらは『脈経』の記載が『胎産書』とは全く別の系統から発展してきたことを示す。

なお脈診による妊娠の診断は、『脈経』以前にもある。『素問』陰陽別論篇第 7<sup>[3]</sup>に「陰拍陽別、謂之有子」、平人氣象論篇第 18<sup>[4]</sup>に「婦人手少陰。脈動甚者妊子也」とあり、いずれも妊娠有無の判断である。また後漢 230 年頃の張仲景医書

に由来する『金匱要略』の婦人妊娠病脈証并治第 20<sup>[5]</sup>に、「婦人懷娠六七月、脈弦發熱。其胎愈張、腹痛惡寒者、少腹如扇。所以然者、子臟開故也」と妊娠中の脈診が記され、これらは吉岡も指摘する<sup>[6]</sup>。すると脈診で妊娠を判断する『脈経』の記載は、『素問』や『金匱要略』の発想の延長にあるとみていいだろう。また『金匱要略』婦人妊娠病脈証并治第 20<sup>[7]</sup>では「懷身七月太陰當養不養、此心氣実」と、7ヶ月目に養うべき脈が示されており、当該経脈は『脈経』の7ヶ月目に養うべき経脈と一致する。『金匱要略』には7ヶ月目以外の脈の記述は見られないが、『脈経』以前に妊娠幾月と経脈が関係する説があったことは間違いない。

では『脈経』と、『諸病源候論』『千金方』『産経』の経脈さらに脈診の記載は、どのような関係にあるのだろうか。前述したが、『脈経』と一致する内容が『諸病源候論』<sup>[8]</sup>にあり、冒頭には脈診による妊娠、胎児の性別の判断についての記述もある。それらは順次の違いやいくつかの記述が抜けるなど、全てが一致しているわけではないが、ほぼ『脈経』からの引用とみて間違いない。さらに『新雕』<sup>[9]</sup>『備急』<sup>[10]</sup>にもこれらの記述がある。他方、『医心方』所引の『産経』では判然としないが、『医心方』は所引文献から脈論を排除して引用する傾向がある<sup>[11]</sup>。つまり、本来は『産経』に存在した脈診の記述を、『医心方』が引用しなかった可能性もあろう。ちなみに経脈説はこの時代すでに臓腑理論と結びついていたので、これら脈論に臓腑の記述が加わっていることもなんら不思議はない。

以上のから、『胎産書』以降の各書は『脈経』の影響も受け、変化・発展していったことがわかる。ただし主たる経脈は12本ある。その十二経脈をどのようにして妊娠の10ヶ月に当てはめたのであろうか。それを説明するには、十二経脈と臓腑・五行の関係について説明する必要があるだろう。

十二経脈はもともと、陰と陽各々を三分して三陰三陽とし、かつ臓腑理論と結び付けることから生まれた<sup>[12]</sup>。しかし12では五行説の五臓（肝・心・脾・肺・腎）五腑（胆・小腸・胃・大腸・膀胱）とはうまく対応しない。そのため、新たに心包という臓と三焦という腑を加え六臓六腑とし、三陰三陽に対応させた。

ちなみに、『胎産書』とともに馬王堆から出土した『十一脈灸経』<sup>[13]</sup>には、書名の通り経脈が11本しかない。抜けているのは心包の脈で、当時点では五臓六腑説だったらしい。つまり『十一脈灸経』が著された時代、経脈と臓腑の理論は発展途上だった。『胎産書』に経脈の記述がないのは、当書が『十一脈灸経』と

は別系、あるいはより古い成立だった可能性を示唆しよう。

ところで逐月胎児説の経脈について、各月の養うべき脈を五行にあてはめてみるとどうだろう。3ヶ月目の心包、4ヶ月目の三焦が相火に配されるようになるのは宋代だが<sup>[14]</sup>、『難経』十八難<sup>[15]</sup>に以下の記述がある。相火の記載はないものの、心包の脈・三焦の脈が火に配されていたことが分かる。

手太陰陽明金也。足少陰太陽水也。金生水。水流下行、而不能上。故在下部也。足厥陰少陽木也、生手太陽少陰火。火炎上行、而不能下。故爲上部。手心主少陽火、生足太陰陽明土。土主中宮。故在中部也。此皆五行子母、更相生養者也。

『難経』の記述に従い、以下に各月の脈の五行を順に記す。①木、②木、③火、④火、⑤土、⑥土、⑦金、⑧金、⑨水、⑩水（ただし10ヶ月目は『産経』のみに記述がある）。当順次は五行相生説（木生火、火生土、土生金、金生水、水生木）に合致させられており、杉立もこの点を指摘する<sup>[16]</sup>。

ここで、手太陽脈・手少陰脈が10ヶ月の養うべき脈に入らなかった理由を考えてみたい。手少陰脈は、『素問』平人氣象論篇第18<sup>[17]</sup>に「婦人手少陰脈動甚者、妊子也」、『靈樞』論疾診尺第74<sup>[18]</sup>に「女子手少陰脈動甚者、妊子」とあるように、胎児の生命と大きく関わる脈であった。また『素問』血氣形志第24<sup>[19]</sup>は「手太陽与少陰為表裏」と手少陰・手太陽の表裏関係を説く。そのため『脈経』では手太陽脈・手少陰脈を月ごとの禁脈からはずし、いずれの月であっても針や灸をしてはいけないとしたのであろう。

## 2 胎児の発育

先述のごとく経脈とそれに対応した成長は、全ての書に同じ記述があるわけではない。経脈に関しては、『産経』にのみ10ヶ月目の足太陽脈（膀胱経）の記載がある。しかし成長に関しては各書にかなりの違いがあり、たとえば『新雕』『産経』には成長の記述がない。そこで当節では『諸病源候論』『備急』に基づき、胎児の発育記述について考察する。

まず、各月の発育記載を比べてみよう。以下にその比較表をあげるが、各月ともに、上に各月の養うべき経脈とそれに対応する臓腑とその主る器官、下に胎児

の發育を記す。

[表 7] 胎児の成長

	諸病源候論	備急千金要方
1 ヶ月	足厥陰者肝之脈也、肝主血。	足厥陰内屬於肝、肝主筋乃血。
2 ヶ月	足少陽脈者胆之脈也、主於精。 二月之時、児精成於胞裏	足少陽内屬於胆、主精。 二月之時、児精成於胞裏
3 ヶ月		
4 ヶ月	四月之時、児六腑順成	四月之時、児六腑順成
5 ヶ月	足太陰脾之脈、主四季。 五月之時、児四肢皆成	五月之時、児四肢皆成
6 ヶ月	足陽明者胃之脈、主其口目 六月之時、児口目皆成	足陽明内屬於胃、主其口目 六月之時、児口目皆成
7 ヶ月	手太陰者肺脈、主皮毛 七月之時、児皮毛已成	手太陰内屬於肺、主皮毛 七月之時児、皮毛已成
8 ヶ月	手陽明者大腸脈、主九竅 八月之時、児九竅皆成	手陽明内屬於大腸、主九竅 八月之時、児九竅皆成
9 ヶ月	足少陰脈者腎之脈、腎主統縷 九月之時、児脈統縷皆成	足少陰内屬於腎、腎主統縷 九月之時、児脈統縷皆成
10 ヶ月		

表 7 からわかるように、『諸病源候論』と『備急』の記載はそれほど大きなちがいがなく、各臓腑が主る器官に対応して胎児も發育している。

ここに記した経脈の順次が五行相生説に合致することはすでに指摘した。ところが当表の各上段に示した胎児の發育には五行との関連を見出すことはできない。するとこの記述には、いかなる背景があるのだろうか。

『素問』には臓腑とその主る人体組織の条文がある。それらは陰陽應象大論篇第 5<sup>[20]</sup>、宣明五氣篇第 23<sup>[21]</sup>、痿論篇第 44<sup>[22]</sup>に見られ、各々を整理すると以下

のようになる。なおマル数字は逐月胎児説で該当する養うべき妊娠幾月を示す。ただし3ヶ月目は心包なので、対応していない。

- ① 「肝主筋」「肝主身之筋膜」「肝主目」「肝主筋」
- ③ 「心主脈」「心主身之血脈」「心主舌」「心生血」
- ⑤ 「脾主肉」「脾主身之肌肉」「脾主口」「脾生肉」
- ⑦ 「肺主皮」「肺主身之皮毛」「肺主鼻」「肺生皮毛」
- ⑨ 「腎主骨」「腎主見之骨髓」「腎主耳」「腎生骨髓」

以上を表7と比べると、肝・肺に共通した部分が見られる。脾に共通部分はないが、脾と同じ土に属する胃には見ることができる。すると表7の胎児の成長は、これら『素問』の臓腑理論に基づくであろう。ところが『胎産書』にはある程度の発育の記述があるため、『胎産書』と同じ記述を用いることはなるべく避けた。その上で、10ヶ月までに胎児に人間としての形を全て備えさせたかった。

こうした結果出来上がったのが、『諸病源候論』『備急』にのみ見られる胎児の成長なのではなかろうか。なぜなら『胎産書』に示された成長器官に表7の成長記述を用いると、全ての器官・形態を備えた人間になるからである。

### 3 養胎

『胎産書』にない新しいタイプの養胎法があるのは『新雕』『備急』『産経』で、『諸病源候論』には存在しない。すでに明らかにしたように、『胎産書』以降の発展には『素問』『脈経』などの臓腑経絡説の影響が背景の一部にある。では新タイプの養胎法も、『素問』などの記載と何らかの関係があるのだろうか。以下、表8に『新雕』『備急』『産経』より妊娠各月に記される臓腑と、各月の養胎法を整理した。

[表8] 養胎法

	新雕孫真人千金方	備急千金要方	産経
①肝		不為力事、寝必安静。 無令恐懼	亦不宜為力事。寝必安 静、无令恐懼



②胆	当慎護驚動	当慎護驚動也。	当護慎勿驚之
③心包	無悲哀思慮驚動	無悲哀思慮驚動	心无悲哀无思慮驚動之
④三焦	静形軀和心志、節飲食	当静形軀和心志、節飲食	静安形体、和順心志、節飲食之
⑤脾	無大飢、無甚飽、無食乾燥、無灸、無勞倦	無大飢、無甚飽、無食乾燥、無灸熱、無勞倦	無大飢、無甚飽、無食乾燥。無自灸熱、大勞倦之
⑥胃	調五味、食甘和、無大飽	調五味、食甘羹、無大飽	調和五味、食甘。甘和无大飽
⑦肺	無大言、無号哭、無洗浴、無寒飲	無大言、無号哭、無洗浴、無寒飲	无大言、无号哭、无薄衣、无洗浴、无寒飲之
⑧大腸	無食燥物、無輒失食	無食燥物、無輒失食、無忍大起	无食燥物、无忍大起
⑨腎	無处湿冷	無处湿冷、無著灸衣	无处湿冷、无著灸衣
⑩膀胱			无处湿地、无食大熱物

当表を見ると、これら養胎法には感情や飲食・生活環境の禁忌が多いことが分かる。一方、感情や飲食・生活環境と五臓・組織が関連する記載を『素問』に見ることができる。『素問』陰陽應象大論篇第 5<sup>[23]</sup>にこうある。

怒傷肝、悲勝怒。風傷筋、燥勝風。酸傷筋、辛勝酸。…喜傷心、恐勝喜。熱傷氣、寒勝熱。苦傷氣、鹹勝苦。…思傷脾、怒勝思。湿傷肉、風勝湿。甘傷肉、酸勝甘。…憂傷肺、喜勝憂。熱傷皮毛、寒勝熱。辛傷皮毛、苦勝辛。…恐傷腎、思勝恐。寒傷血、燥勝寒。鹹傷血、甘勝鹹。

『素問』経脈別論篇第 21<sup>[24]</sup>にもこうある。

飲食飽甚、汗出於胃。驚而奪精、汗出於心。持重遠行、汗出於腎。疾走恐懼、汗出於肝。揺体労苦、汗出於脾。

表 8 の養胎法は上記『素問』の記載と一部共通するが、特徴的語彙の合致もなく、『素問』の直接引用とは考えられない。

他方、『靈樞』順氣一日分為四時第 44<sup>[25]</sup>に「夫百病之所始生者、必起于燥湿

寒暑風雨、陰陽喜怒飲食居処」とあり、感情や飲食・居所は疾病の原因とされていたと理解される<sup>[26]</sup>。他にもこれらを疾病と関係づける記載は多い<sup>[27]</sup>。つまり、疾病の原因になりうるものが養胎の禁忌事項に関係していると分かる。

上記の原因で疾病が発生するのは、『素問』調經論篇第 62<sup>[28]</sup>に「血氣不和、百病乃變化而生」とあるように、血氣が乱れるからである。ならば気の乱れと、胎児への影響は何か関係があるのだろうか。『素問』奇病論篇第 47<sup>[29]</sup>に次の記述がある。

帝曰、人生而有病巔疾者、病名曰何、安所得之。岐伯曰、病名為胎病。此得之在母腹中時、其母有所大驚、氣上而不下、精氣并居、故令子發為巔疾也。

当文でてんかんの発作を岐伯は「胎病」とする。そして、妊娠中に母親が驚いたことで気が下らなくなり、生まれてくる子はてんかんの発作をおこすようになるという。つまり、気の乱れは疾病の原因になるだけでなく、胎児に悪影響を与えるという考えが『素問』から存在していたことになる。

『諸病源候論』には以下の記載がある。

①此或因驚動倒仆、或染温疫傷寒邪毒入於胞藏、致令胎死、其候当胎处冷為胎已死也。（卷 41 任娠胎死腹中候）<sup>[30]</sup>

②胎動不安者、多因勞役氣力、或触冒冷熱、或飲食不適、或居処失宜。輕者止転動不安、重者便致傷墮。（卷 41 任娠胎動候）<sup>[31]</sup>

①では驚いて倒れたり、けがや病気による胎児への感染症を説く。②では気力を使ったり、飲食・居所が適切でないと胎児は安定せず、ひどい場合は流産するとある。さらに病気が流産につながることも示している。要するに当時、疾病そのものが胎児に悪影響を与えるという考えも存在していたのである。

以上から、『産経』『千金方』に見られる新しいタイプの養胎法には、『素問』『靈枢』に見えた疾病の原因との関係が考えられる。母親の気の乱れが胎児に害を与えるという発想はすでに存在していたから、発展して、疾病の原因そのものが胎児に悪影響を及ぼす、と考えられるようになっていても不思議はない。また『諸病源候論』には、母親の疾病が流産につながることも説かれていた。『産経』『千金方』に『諸病源候論』と共通する記述はないが、母親の病気を防ぐためであった可能性も考えられるだろう。いずれにしろ、『素問』『靈枢』の病理説から発展した可能性は推定できる。

#### 4 各書における所説の伝承関係

上述してきたように『諸病源候論』『千金方』『産経』の胎発育説は、『胎産書』の胎発育説とは別系統の論説が付加されていた。ここでは別系統の論理が、各書にどのように伝承され、変化・発展が加わっていたかを検討したい。これまで『胎産書』に記述のない新タイプの胎発育説を考察してきたが、それらは①から④に整理できる。

- ①各月に養われる経脈
- ②感情や飲食・生活環境などの禁忌と養胎
- ③臓腑が主る器官等
- ④胎児の発育

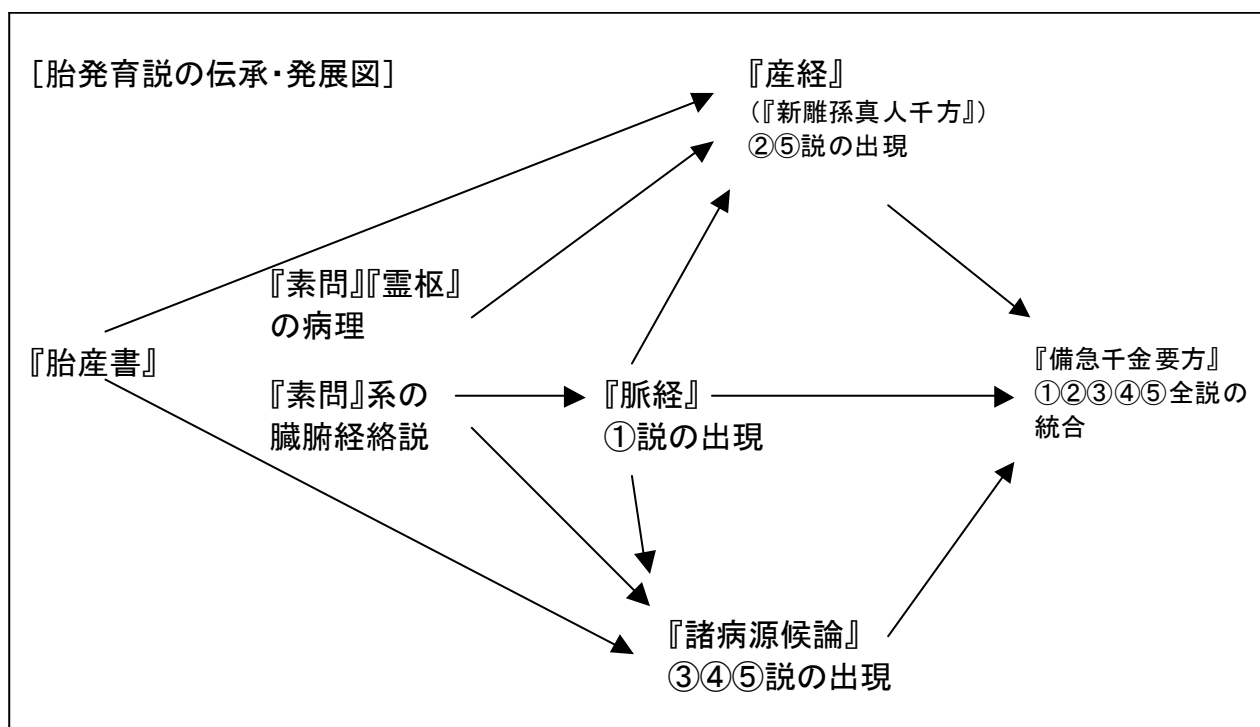
以上に⑤として『胎産書』以来の3ヶ月目の養胎の発展を加え、各文献における記述の有無を表9に示した。なお③の『産経』にある△は1ヶ月目にしか当該記述がないことを示す。

〔表9〕胎発育説の内容分布

	諸病源候論	新雕	備急	産経
①各月に養われる経脈	○	○	○	○
②禁忌と養胎	×	○	○	○
③臓腑が主る器官等	○	×	○	△
④胎児の発育	○	×	○	×
⑤3ヶ月目の養胎	○	×	○	○

本表から各文献の伝承と発展の関係がおぼろげながら見えてくる。まず『胎産書』にはない①の各月に養われる経脈の記述が、『素問』系の臓腑経脈説から誕生した。前述のように現存文献で最も古い当内容は『脈経』にあった。さらに『脈経』から発展し、『諸病源候論』以外の全てに②感情や飲食・生活環境などの禁忌と養胎が誕生する。当時点の文献は『新雕』『産経』にあたるだろう。その一方で『諸病源候論』には②説がなく、③臓腑が主る器官等と④胎児の発育記述が

登場した。これは前述のごとく『素問』系の臟腑經脈論の発展と考えられる。そして①②③④⑤の全てが付加された現伝の『備急』となる。これらの結果をふまえ、各文献記載における、胎發育説の伝承と発展の関係を以下に図示する。



## 5 『備急千金要方』『産経』『崔氏方』

『備急』『産経』の胎發育説はすでに述べた。しかし当二書には『胎産書』系統とは内容を異にする説が存在する。すなわち『備急』では『胎産書』系統の發育説の 10 ヶ月目の後に<sup>[32]</sup>、『産経』では前に記述がある<sup>[33]</sup>。『崔氏方』は『外台秘要方』巻 35「小児初受氣論」に記述があり<sup>[34]</sup>、小曾戸は 7 世紀前半の成立とする<sup>[35]</sup>。各書の記述を表 10 にまとめてみる。

[表 10] 『備急』『産経』『崔氏方』の胎發育説

	産経	崔氏方	備急千金要方
1 ヶ月	胚（又曰胞）	結胚	胚
2 ヶ月	胎	作胎	膏
3 ヶ月	血脈	有血脈	胞
4 ヶ月	具骨	形体成	形体成
5 ヶ月	動	能動	能動

6 ヶ月	筋形成	筋骨立	筋骨立
7 ヶ月	毛髮生	毛髮生	毛髮生
8 ヶ月	瞳子明	蔵腑具	臓腑具
9 ヶ月	谷氣入胃	穀氣入胃	穀氣入胃
10 ヶ月	児出生	百神能備而生	諸神備日満即産

当表より 3 書の所説にわずかな違いは認められるものの、各月の記述はほとんど一致しており、同じ祖型から発展していると考えられる。しかし 3 書の年代関係や祖型を示唆する文献は見出されず、これ以上の考究は難しい。

## 6 小結

以上をまとめると次のようになる。

(1)『胎産書』とは別系から発展した『脈経』の脈論が、後世『諸病源候論』『千金方』『産経』の胎発育説に導入されていた。そこに記された妊娠 10 ヶ月間に養われる経脈は六臓六腑に対応した十二経脈と五行説の解釈から作成されていた。

(2)『諸病源候論』『備急』には、『胎産書』にない新タイプの胎児発育記述が出現した。当記述は『素問』系の臓腑理論に基づいており、『胎産書』からの発育の記述に加え、人間に必要な器官を備えさせるためのものであった。

(3)『産経』『千金方』に見られる養胎の禁忌事項は、『素問』『靈枢』の病理説の発展形と推測された。

(4)『産経』『備急千金要方』『崔氏方』には、ほぼ一致して『胎産書』系統と内容を異にする胎発育説の記述があり、それらは同じ祖型に基づくと考えられた。

## 参考文献と注

[1]小曾戸洋『中国医学古典と日本』314 頁、東京・塙書房、1996 年。

- [2]王叔和『脈経』（東洋医学善本叢書七）89 頁、大阪・東洋医学研究会影印何大任仿宋版、1981 年。
- [3]『素問』巻 2、16 葉オモテ、東京・日本経絡学会、1992 年。
- [4]上掲文献[3]東京・日本経絡学、1992 年。
- [5]張仲景『金匱要略』下巻第 1 葉ウラ、東京・燎原書店、1988 年。
- [6]吉岡広記「唐以前における妊娠の認識について」『日本医史学雑誌』49 巻 1 号 78～79 頁、2003 年。
- [7]上掲文献[5]、下巻第 3 葉オモテ。
- [8]巢元方『諸病源候論』（東洋医学善本叢書六）194・195 頁、大阪・東洋医学研究会影印南宋版、1981 年。
- [9]孫思邈『新雕孫真人千金要方』巻 2 妊娠惡阻第 2 第 10 葉オモテ～14 葉オモテ、静嘉堂文庫（東京）所蔵南宋版のマイクロフィルム焼き付けによる。
- [10]孫思邈『備急千金要方』、巻 2 第 8 葉オモテ、婦人有胎候惡阻方第二、北京・人民衛生出版社影印江戸医学館仿宋刊本、1982 年。
- [11]上掲文献[1]、543 頁。
- [12]小曾戸洋『漢方の歴史—中国・日本の伝統医学』26・27 頁、東京・大修館書店、1999 年。
- [13]『馬王堆漢墓帛書 [肆]』1 頁～13 頁、北京・文物出版社、1985 年。
- [14]山田は相火・君火の記述のある『素問』運氣七篇は宋代に挿入されたとする（山田慶兒『氣の自然像』18 頁、東京・岩波書店、2002 年）。
- [15]丹波元胤『難経疏証』29 頁、台北・大新書局、1971 年。
- [16]杉立義一『医心方の伝来』184 頁、京都・思文閣出版、1991 年。
- [17]上掲文献[3]、巻 5 第 11 葉ウラ。
- [18]『靈枢』巻 21 第 4 葉ウラ、東京・日本経絡学、1992 年。
- [19]上掲文献[3]、巻 7 第 11 葉ウラ。
- [20]上掲文献[3]、巻 2 第 4 葉オモテ～6 葉ウラ。
- [21]上掲文献[3]、巻 7 第 11 葉オモテ。
- [22]上掲文献[3]、巻 12 第 8 葉ウラ。
- [23]上掲文献[3]、巻 2 第 5 葉オモテ～6 葉ウラ。
- [24]上掲文献[3]、巻 7 第 1 葉ウラ。

- [25]上掲文献[18]、巻 13 第 5 葉オモテ。
- [26]丸山敏秋『黄帝内経と中国古代医学－その形成と思想的背景および特質』225 頁、東京・東京美術、1988 年。
- [27]『靈枢』百病始生第 66「夫百病之始生也、皆生于風雨寒暑清湿喜怒」、『素問』調經論篇第 62「夫邪之生也、或生於陰、或生於陽、其生於陽者、得之風雨寒暑、其生於陰者、得之飲食居處、陰陽喜怒」などとある。
- [28]上掲文献[3]、巻 17 第 1 葉ウラ。
- [29]上掲文献[3]、巻 13 第六葉ウラ。
- [30]上掲文献[8]、169 頁。
- [31]上掲文献[8]、169 頁。
- [32]上掲文献[10]、24 頁に「妊娠一月始胚、二月始膏、三月始胞、四月形体成、五月能動、六月筋骨立、七月毛發生、八月臟腑具、九月谷氣入胃、十月諸神備、日滿即産矣」とある。
- [33] 丹波康頼『医心方』（国宝半井家本）巻 22 第 2 葉オモテ（大阪・オリエン  
ト出版、1991 年）に「産経云、黄帝問曰、人生何如以成。岐伯対曰、人之始生、  
生於冥冥、乃始為形。形容無有憂、乃為始収。妊身一月曰胚、又曰胞、二月曰胎、  
三月曰血脈、四月曰具骨、五月曰動、六月曰形成、七月曰毛髮生、八月曰瞳子明、  
九月曰穀入胃、十月曰児出生也」とある。
- [34] 王燾『外台秘要方』（東洋医学善本叢書 5）巻 35 第 6 葉ウラ（大阪・オリ  
エン  
ト出版影印南宋版、1981 年）に「崔氏論曰、凡小児初受氣、在娠一月結胚、  
二月作胎、三月有血脈、四月形体成、五月能動、六月筋骨立、七月毛髮生、八月  
藏腑具、九月穀氣入胃、十月百神能備而生矣」とある。
- [35]上掲文献[1]、304 頁。

## 結論

本稿では妊娠 10 ヶ月間の胎児の成長、および養胎や妊婦の修身法を記した胎  
發育説について、戦国秦漢代から南北朝隋唐代に至るまでの記載を検討した。以

下にこれらの考察結果を総括する。

戦国秦漢代の胎発育説は『胎産書』・『管子』水地篇・『淮南子』精神訓に見える。その他、各月の記述ではないものの『靈枢』経脈に胎児の発育記述が存在し、生命発生の記述は『莊子』・『管子』内業篇・『素問』・『靈枢』などにあった。各書の胎発育説には様々な思想が見られたが、それは身体器官、五行説との関係、現代の医学知見との比較、という3点からおおよそ説明できる。

## ①身体器官

『胎産書』・『管子』水地篇・『淮南子』精神訓に記された胎児の発育器官は、表11のように大きな違いが見られた。

[表11] 『胎産書』『管子』『淮南子』に記された発育器官

『胎産書』	血	気	筋	骨	膚革	毫毛		
『管子』				骨	革・肉		隔	脳
『淮南子』			筋	骨	肌			

『胎産書』の血・気・筋・骨・膚革・毫毛は『周礼』や『脈書』にもまとまって記載されており、身体構成器官として認識されていたことが明らかになった。『管子』の隔・脳は、血気を生命の根源とする水地篇の思想により、代わりに加えられた身体器官と考えられる。『淮南子』の肌・筋・骨は外郭の形成のあとに内部の発達が進むという思考を元に、表皮と骨格を示したと考えられた。他方、『胎産書』において「気」は筋・骨・その他身体構成器官の一つだったが、『莊子』その他の古典籍では「気」ないし「精」が生命の根源として用いられていた。この「精」「気」概念の発展は医書にも影響を与え、『靈枢』経脈では「精」が生命の本と考えられている。

## ②五行説との関係

『胎産書』の五行精＋石精と対応する発育器官は現行の五行説とは一致しない。しかし『管子』四時編や『周礼』に類似の記述があり、現行五行説とは異なる配当の存在が推測された。一方、五行精に一つを加え六にする記述は『左伝』『尚



書』にある。さらに六の概念は漢以前でも多数存在していた。

『管子』水地篇では五味と五臓・五臓と五内・五臓と九竅、『淮南子』精神訓では五臓と九竅の関係が説かれていた。このような五味・五臓・九竅の関係は『素問』『靈樞』で五行説と関連する形で見られるが、合致する記述はなかった。

したがって『胎産書』『管子』『淮南子』の記述より、発展段階の五行もしくは未詳の論理の存在が示唆された。

### ③医学知見との比較

現代判明している医学知見と比較すると、『胎産書』は流産などによる胎児観察で、外性器が形成される時期をほぼ正確に把握していたと推定された。胎児の成長の記述が4ヶ月目の血から始まったのも胎児観察によると考えられる。ところが4ヶ月目からの成長を五行で述べると8ヶ月目で終わってしまうため、当時存在していた六の概念を用いたと判断された。

『管子』の胎发育説は3ヶ月目・5ヶ月目・10ヶ月目だけである。これはつわり・胎動・出産の時期と一致し、妊婦の自覚しやすい症状を記していると考えられた。

このように戦国秦漢代の胎发育説には、胎児・妊婦の観察に基づく認識と様々な思想が見られたが、南北朝隋唐代の医書が伝承したのは『胎産書』の内容のみであった。その伝承と発展の大略は以下の通りである。

『胎産書』系の内容からは後世、養胎説が発展していった。養胎法は一般的養生が主であったが、一部には形象イメージや、胎教・五行説を援用した方法が説かれていた。

『諸病源候論』『千金方』『産経』で新出の脈論は、『胎産書』と別系の『脈経』から導入され発展していた。その妊娠10ヶ月間に養われる十経脈は、『素問』以来の六臓六腑に対応する十二経脈と五行説の解釈から作成されている。

『諸病源候論』『備急』で新出の胎児の发育記述は『素問』系の臓腑説に由来する可能性が考えられた。これらは『胎産書』の記述に加え、人間に必要な組織を備えさせるためだったらしい。

『千金方』『産経』に存在した新しいタイプの養胎法は、感情・飲食・居所を

疾病の原因とする『素問』『靈樞』の病理論の発展と考えられた。

以上の全考察より、戦国秦漢代の胎发育説は、『胎産書』系の内容のみ南北朝隋唐代の医書へ発展しながら受け継がれていったことを明らかにしえた。そして南北朝隋唐代に受け継がれた胎发育説は、現行五行説の内容が深く浸透している『素問』『靈樞』の影響を受けた新出内容を多く含んでいた。このため、五行精を用いる現行五行説に近いかたちの『胎産書』の胎发育説が受け入れられたのではないだろうか。一方で『管子』は五行説とは全く一致せず、身体器官の隔・脳は五行説に当てはめることもできない。そのため、医書で用いられることもなかったのだろう。また万物の根源を水とするのは『管子』水地篇特有の思想でもある。これゆえ『淮南子』のように医書以外の伝承もなかったと考えられる。

戦国秦漢代に実際の観察と諸概念から形成された諸胎发育説は、これらの背景があって『胎産書』系の説だけが発展し、後世の医書に伝承を続けたのである。

## 謝辞

本稿の作成にあたりご指導いただいた真柳誠先生、資料のご教示と貴重なご助言をいただいた林克先生、遠藤次郎先生、西野由希子先生、鈴木敦先生のご厚意に深謝申し上げます。